

第7項 レーダー探査

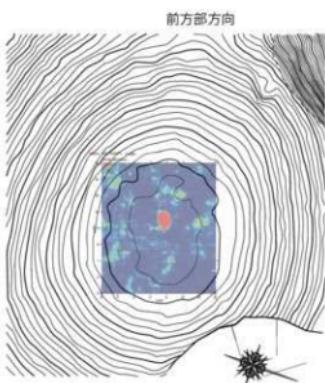
生目1号墳の後円部墳頂において、埋葬施設の情報を得るために地中レーダー探査を実施した。探査は宮崎県立西都原考古博物館に依頼し、平成27年8月26日におこなった。後円部墳頂は、地中レーダー探査に先んじて、平成25年度に3ヶ所の調査区を設定し発掘調査をおこなっていた。そのためこれらの調査区がノイズとして検出され、探査に影響が出る可能性があつたが、結果として埋葬施設を検討する上で重要な知見を得ることができた。探査範囲は南北方向14m、東西方向16mである。

探査は中心周波数500MHzのアンテナを使用しおこなった。現地表下73~98cm付近から、後円部のほぼ中心付近、長軸約7.1m、短軸約4.9mの長方形の範囲において、周辺と比較すると反射が弱い部分が検出された。この反応は一度やや不明瞭になるが、現地表下291~316cm付近で再び明瞭になり、その長方形の範囲の中心に強い反射が見られるようになる。強い反射の範囲は、長軸約2.6m、短軸約1.7mである。上記の変化や、第50図の3D図の状況から、反射が弱い部分が墓坑であり、中心の反射が強い部分が埋葬施設である可能性が高い。埋葬施設と想定される強い反射は現地表下368~393cm付近まで確認される。ここから、長軸約2.6m、短軸約1.7m、高さ1m程度の構造物が想定される。また、埋葬施設と思われる反応が弱くなり始める深度から、X=0~4m、Y=13~16mの範囲において強い反射が見られるようになる。溝状の形状や方向、確認される深度から排水溝の可能性が想定される。

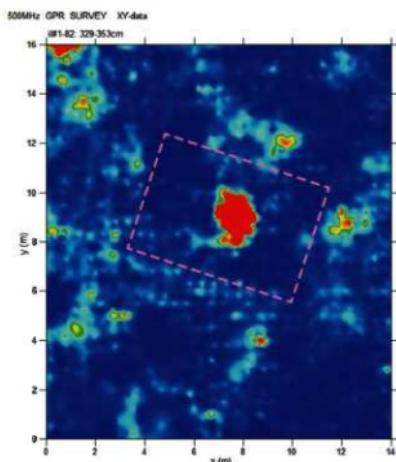
以下、地中レーダー探査の結果から想定される埋葬施設の状況を纏めておくと、墓坑は墳丘主軸にほぼ直交し、南北方向に墓坑主軸を向ける。墓坑規模は7m×5m前後と想定され、後円部墳頂平坦面の規模（東西17.5m、南北16.1m）や墳丘規模からみると小規模である。墓坑中央から埋葬施設と思われる強い反応が検出され、その反応が弱くなる深度から南くびれ部方向へ向け排水溝と想定される反応が確認された。

前期古墳において墓坑の規模で比較すると、墳丘規模が近しい奈良県中山大塚古墳（17m×12m：墳長132m）、黒塚古墳（17m以上×15m以上：墳長約130m）、下池山古墳（13.8m×8.2m：墳長125m）、岡山県浦間茶臼山古墳（15.3m×10.4m：墳長138m）、福岡県豊前石塚山古墳（10.7m×5.7m：墳長130m）は元より、西都原13号墳（上面14m×11m、底面9m×6m：墳長80m）、西都原100号墳（径11.5m：墳長57.4m）といった、日向地域に所在する墳丘規模が小さい前期古墳の墓坑よりも小型である。この中で、中山大塚古墳、黒塚古墳、下池山古墳、浦間茶臼山古墳、豊前石塚山古墳はいわゆる長大な竪穴式石槨を埋葬施設とし、西都原13号墳は疊粘土槨を埋葬施設とする。長大な木棺を内包し、複雑な構造の埋葬施設を構築するために大型の墓坑が必要であったと考えられる。短小な墓坑規模が類似する事例としては、佐賀県久里双水古墳（6.1m×4.37m：墳長90m）がある。ただし、墓坑内に構築された竪穴式石槨の内法は、長さ2.65m、幅0.92m、高さ0.98mであるが、レーダーの反応が強く表出すると思われる石槨外法は、長さ4.08m、幅2.56m、高さ1.02mであり、生目1号墳の反応よりも長さの数値が大きい。レーダー探査の結果と発掘調査成果の比較であり、判然としない部分も多く、埋葬施設の解明にはやはり発掘調査が必要であろう。

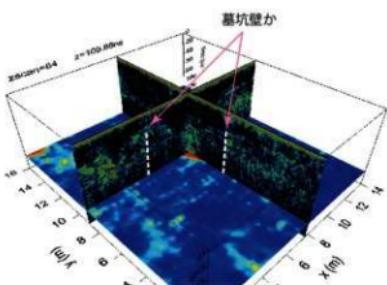
その他、生目古墳群では、3号墳、22号墳において後円部墳頂平坦面のレーダー探査をおこ



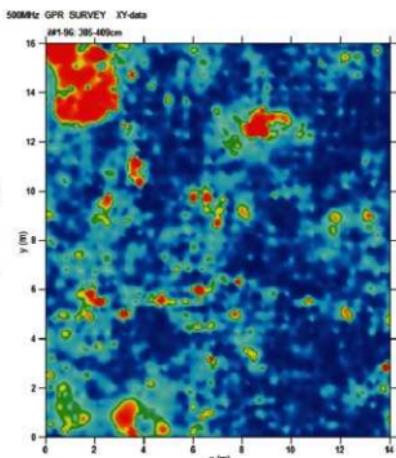
第48図 GPR探査範囲図



第49図 GPR探査平面図：329-353cm
(アンテナ中心周波数 500MHz)
※破線は加筆

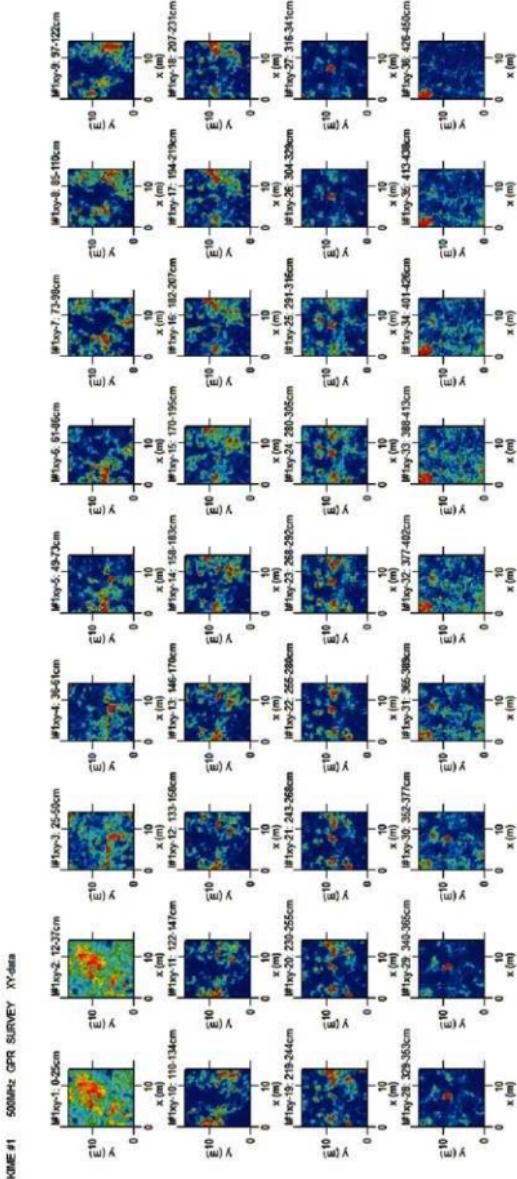


第50図 GPR探査3D図



第51図 GPR探査平面図：385-409cm
(アンテナ中心周波数 500MHz)

なっている。3号墳では現地表下467-492cmにおいて、長軸8.2m、短軸5.5mの長方形の反応が、22号墳では現地表下199-223cmにおいて、長軸6m、短軸1.4mの棒状の反応が検出されている（何れも未報告、生目の杜遊古館にパネル展示）。22号墳は形状やその明瞭な反応から粘土壠の可能性も想定される。



第 52 図 GPR 探査平面図（アンテナ中心周波数 500MHz）

第8項 小結

ここでは今回の発掘調査によって明らかになった点を纏め、小結としたい。

墳丘 墳丘形態の復元に関しては第III章に譲り、ここでは調査結果のみを記述する。墳長は前方部前面が削平されているため明らかにすことができなかつたが、残存墳丘長は118mを測る。後円部径は2号墳の影響がない南北方向の値を採用すると、径74m、高さはB調査区の墳端から13.3mを測る。くびれ部幅や前方部の値に関しては復元値となるため、第III章で後述する。

段構成は後円部、前方部とともに3段築成であることが明らかになった。生目3号墳、22号墳は後円部3段、前方部2段築成であり、生目古墳群の100mを超える大型古墳の中で唯一の段構成である。後円部は3段目の比率が高く、逆に前方部は3段目の比率が低い。後円部頂と前方部頂の比高差は5mを測り、前方部頂が後円部3段目斜面途中に隆起斜道となり取り付く形となる。

平面形は、前方部の墳端付近が全面的に削平を受けていたため、前方部の外郭線に関しては明らかにしえなかつた。前方部2段目、3段目の形状は前方部前面に向けて大きく開く形状ではないが、原田氏の測量図から最下段のみ大きく開く可能性もある。後円部東側は隣接する2号墳を避けるように1段目斜面幅を大きく短縮しており、東西方向が潰れた歪な形状となつてゐる。

葺石 調査の結果、1号墳は後円部は斜面に葺石、平坦面に礫敷を施し、表面全体を石で覆う構造であることが確認された。その一方で、前方部は墳頂平坦面に礫敷が施されていないことが明らかになつた。また、前方部の南側斜面は2段目平坦面以下に葺石、礫敷が施されていない可能性が示唆される調査結果となつた。1号墳の南側には谷を挟んで跡江丘陵が広がつており、外部からの視界が及ばない位置であることから、葺石、礫敷の施工が省略されたと想定される。

1号墳の後円部では葺石、礫敷が非常に良好な状態で検出された。遺存状況が良好であったため、縦方向の施工単位が明瞭に確認でき、区画石列を設ける箇所と目地によって区画を区分する箇所が混在することも明らかになつた。隣接する区画で、平坦面外縁端の区画石列の有無、基底石の有無に差が見られることから、同一工人によるものではないことは明らかであり、複数の工人集団が葺石構築に携わっていたことが明確である。

また、後円部3段目斜面において「波状」、「階段状」とでも言うべき横方向の作業単位が明瞭に検出された。この作業単位は、前述の縦方向の施工単位を越えて共有、つまり作業集団を越えて共有されることから、葺石施工上の必要条件であったと考えられる。葺石の保存を最優先とし、サブトレレンチによる断ち割りをおこなわなかつたことから、あくまで想定ではあるが、墳丘盛土の単位と連動している可能性がある。

出土遺物 前述のとおり、墳頂、くびれ部など一定の面積を調査したが、1号墳の時期を示す遺物は出土しなかつた。僅かに墳頂平坦面の礫敷直上で土師器細片が出土したもの、その量から纏まつた土器祭祀はおこなつていないと想定される。また、埴輪の樹立もなされていないことは各調査区の調査結果から明らかである。

第3節 生目2号墳の調査成果

第1項 生目2号墳の概要

生目2号墳は生目1号墳の東に隣接する円墳である。丘陵の旧地形は1号墳の後円部が最高所であったと思われ、2号墳が築造された位置は東に向かって下降傾斜する地形である。2号墳の東側にはやや間を空け、北から24号墳、25号墳、26号墳が尾根先端に並ぶように立地する。

2号墳の現況は、墳丘の北西側が土採りによって大きく崩落し、ほぼ垂直の崖面となっている。調査以前は測量図がなく、直径27mの円墳という程度の認識であった。隣接する1号墳との関係性に関しては、1号墳の後円部形状が2号墳を避けるように歪な形となっていたため、1号墳と同時併行の築造か、1号墳築造時には2号墳の築造場所がすでに予定されていたのではないか、と想定されていた（柳沢1995）。今回、詳細な測量図を作成したところ、2号墳の等高線も1号墳を避けるようにその間隔を狭めていることから、両墳は築造時期に前後こそあれ、少なくとも企画は同時になされたものと考えられ、柳沢氏の見解を追認するものとなった。周辺地形を見ると、南側にもシラス採りによる崖面が迫っているが、標高25mの等高線付近まで、2号墳の墳形を反映していると思われる円弧を読み取ることができるため、少なくともこの付近までは築造当時の地形を概ね保っていると思われる。

第2項 生目2号墳の調査成果

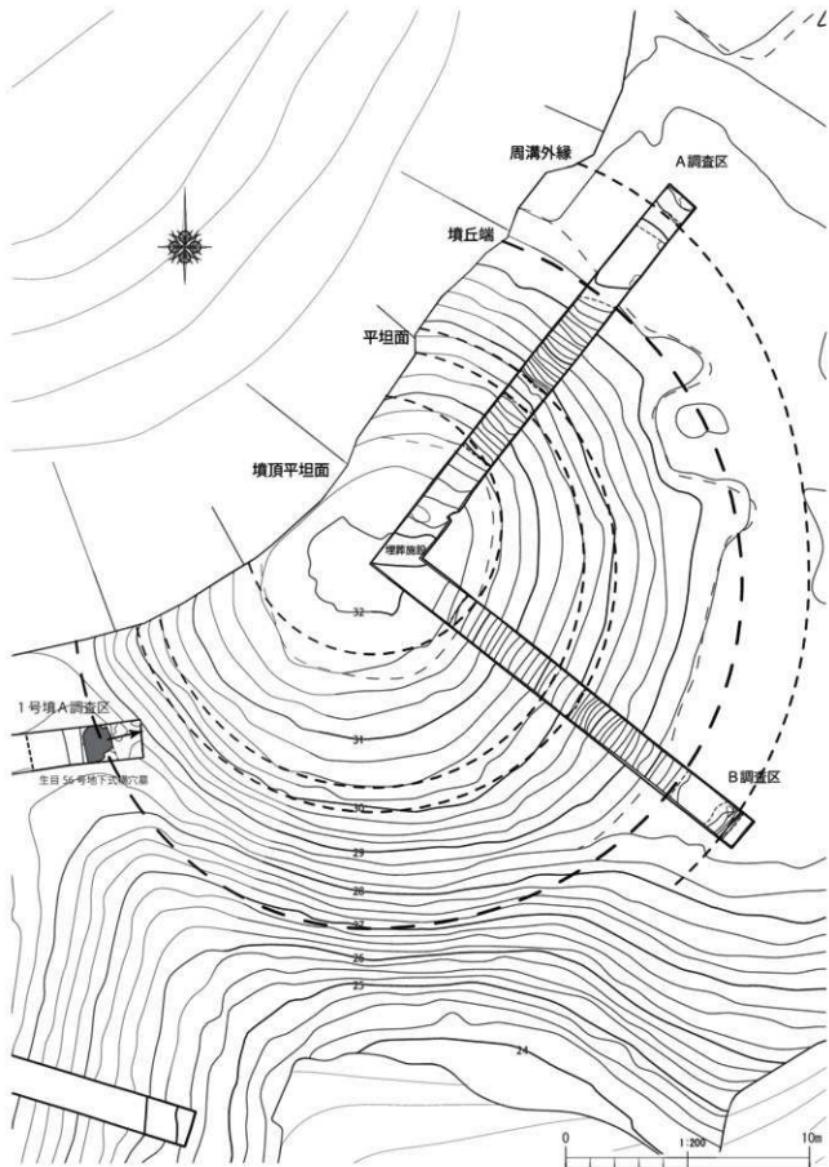
(1) A調査区

概要 A調査区は現況の墳頂平坦面中心から北東方向へ、墳丘と周溝の状況を確認するために設定した調査区である。墳頂で南東方向に90°振ったB調査区と連接する。B調査区と合わせた調査面積は56.18m²である。

調査の結果、墳丘の周囲には周溝が巡り、墳丘が2段築成であること、墳丘下部は地山削り出し、上部は盛土構築であることが明らかになった。

周溝 周溝は外縁側の立ち上がりと思われる傾斜変換点は検出されたものの、樹根の影響により土層が乱れた状況となっている。また、外縁の立ち上がり高も10cmと低く後世の改変が想定される。Th-Sを多量に含む5層の堆積状況をみると、古代から中世段階に削平された可能性が高い。ただし、24号墳B調査区の周溝外南端位置で検出された地山標高と、2号墳A調査区周溝外北東端で検出されている地山標高が概ね等しいことから、2号墳に後出する24号墳築造の際に、墳丘盛土を確保するために周囲を漉き取った結果、2号墳周溝外の一帯が削平を受けた可能性もある。周溝底面からやや浮いた位置で土師器壺(17)、スクレイパー(24)が出土している。

1段目斜面 1段目斜面は基底部から斜度20°の角度で立ち上がり、斜面長は4.3mである。葺石が施されていないため墳丘面が露出しており、基底部から高さ1.2mの位置までが地山削り出し、それより上位が盛土構築である。墳丘地山削り出し部分においては、古墳周囲では周溝内以外に見られない黒ボク土が確認でき、本来は一帯に堆積していた黒ボク土を漉き取り、墳丘盛土の一部として利用したことが想定できる。



第53図 生目2号墳墳丘測量図及び調査区配置図 (S=1/200)

1段目平坦面 1段目平坦面は墳丘基底部から高さ1.8mの位置において幅1mで検出された。礫敷は見られず、外縁側はやや下降傾斜しているため流出していると思われる。盛土を成形し平坦面を作成している。

2段目斜面 2段目斜面は斜面基底部から斜度19°の角度で立ち上がり、斜面長は4.9mである。葺石が施されていないため盛土面が露出し、上位は流出によって傾斜角が緩くなり、ドーム状を呈する。

墳頂平坦面 墳丘面直上層はTh-Sを多量に含む土層であるが、中央付近の埋葬施設と想定される落ち込みからのみ、Th-Sを含まない黒ボク土層が検出された。本来は黒ボク土が墳頂平坦面全面を覆っていたと思われるが、落ち込み部分以外は流出してしまったと考えられる。落ち込みの全面検出はおこなっていないが、長軸2.5m以上、短軸1.3mを測る。上記検出状況や規模から、埋葬施設は木棺直葬が想定される。

(2) B調査区

概要 A調査区から90°振った南東方向へ周溝外縁まで延伸した調査区である。調査の結果、墳丘の検出状況はA調査区と同様であったが、周溝に関しては周溝外縁立ち上がりの肩部まで明瞭に検出された。

周溝 周溝は幅2.9m、深さ0.7mを測り、外縁側は斜度45°の急角度で立ち上がる。土層堆積はA調査区と異なり後世の改変を受けていないため、墳丘、周溝外縁の出土物が周溝底に堆積し、その上に黒ボク層、更に上位にTh-Sを含む黒ボク層が堆積する基本的な層序となっている。周溝外において本来存在する黒ボク土層が検出されなかつたことから、周囲を漉き取り、墳丘盛土の一部として利用していると想定される。

1段目斜面 1段目斜面は基底部から斜度17°で立ち上がり、斜面長は5.6mを測る。葺石が施されていないため墳丘面が露出している。基底部から高さ1.7mの位置までが地山削り出し、それより上位が盛土構築である。地山の最上位層は黒ボク土層であり、ここから古墳周囲にも本来は黒ボク土層が存在していたことが明らかである。

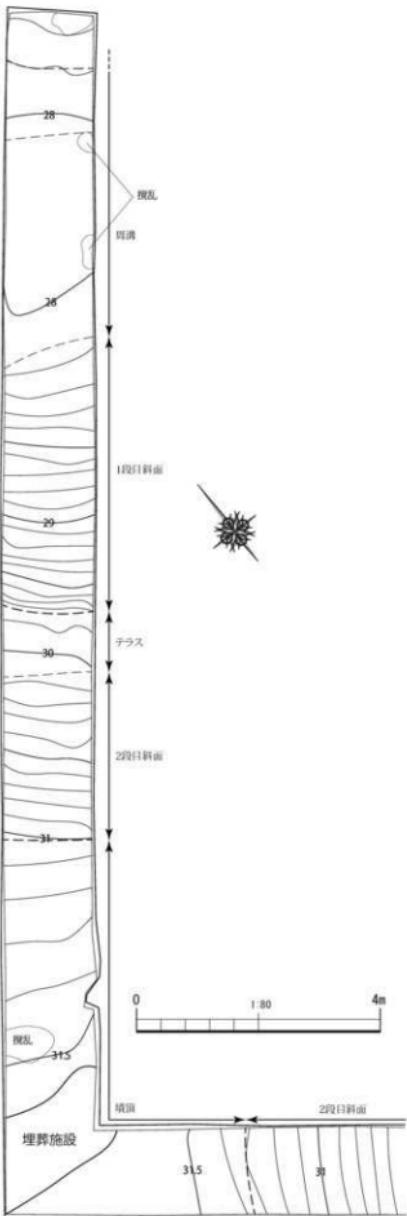
1段目平坦面 基底部から高さ1.8mの位置において幅0.9mで検出された。礫敷はみられない。地山削り出し部に20cm程度の盛土をすることによって平坦面を作出している。

2段目斜面 1段目平坦面から斜度16.5°で立ち上がり、斜面長は5.2mを測る。葺石が施されていないため盛土面が露出し、上位は流出により傾斜角が緩くなっている。盛土内に縄文時代早期のものと思われる焼穂が多数含まれている。

(3) 出土遺物

今回の調査結果から、2号墳に関しても埴輪の樹立や大規模な土器祭祀はおこなっていないことが明らかになった。出土する遺物もほとんどが古墳築造以前のものであり、特に縄文時代早期に該当するものが多い。これらは周溝など縄文時代早期の遺物包含層を掘削した土を墳丘盛土に利用しているためであり、墳丘流出土内から出土したものがほとんどである。

17は周溝から出土した土器師壺である。形態から直口壺と思われる。粘土接合痕が明瞭で、調整は風化が著しく不明である。口縁部を欠くため時期は判然としない。18は墳頂のTh-S含有土内から出土した須恵器壺もしくは壺の胴部片である。外面は格子タタキで内面はナデ調整



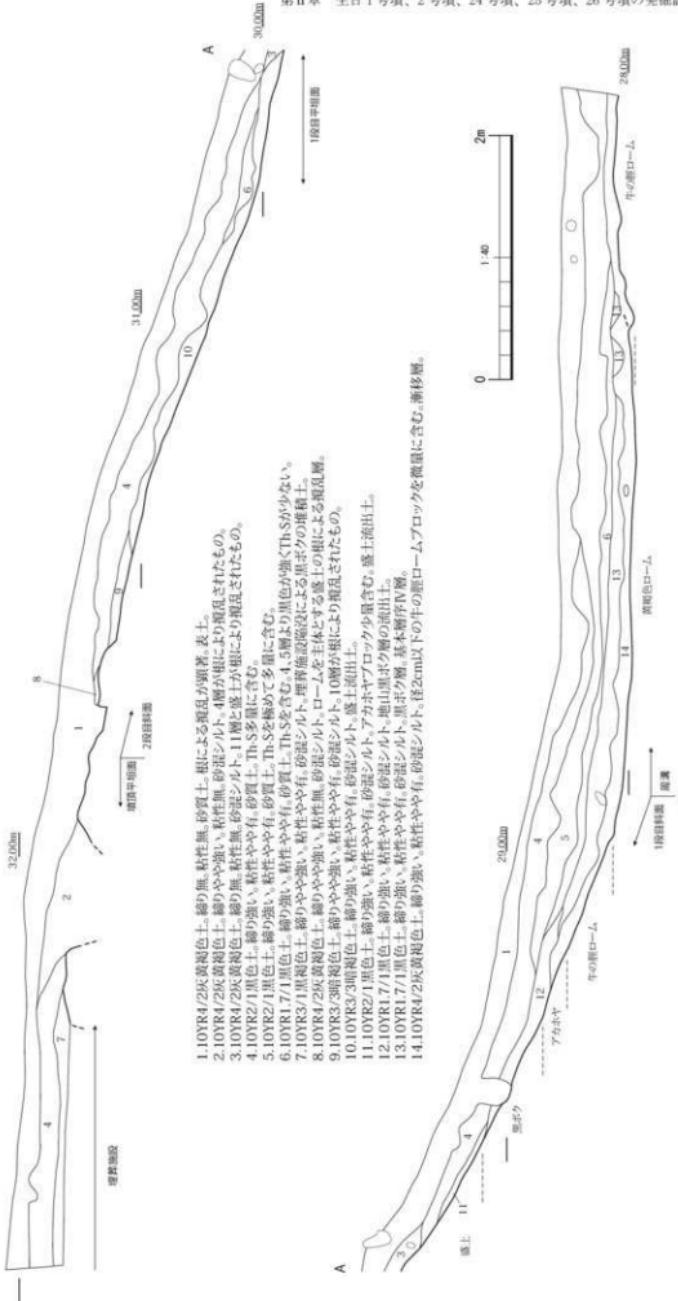
第54図 生目2号墳A調査区平面図 (S=1/80)

である。19～23は縄文土器深鉢である。19は塞ノ神B式土器の口縁部片で外面に貝殻腹縁刺突が施されている。20は貝殻条痕文土器の口縁部片である。21は貝殻条痕文土器の胴部片である。20、21共に外面の条痕は深い。22は鎌石橋式土器の胴部片である。外面に不定方向に条痕文が施されている。23は塞ノ神A式土器の胴部片である。外面に沈線による区画と撲糸文が施されている。24はチャート製のスクレイパーである。左側縁に丁寧な調整を施し、刃部を作出している。

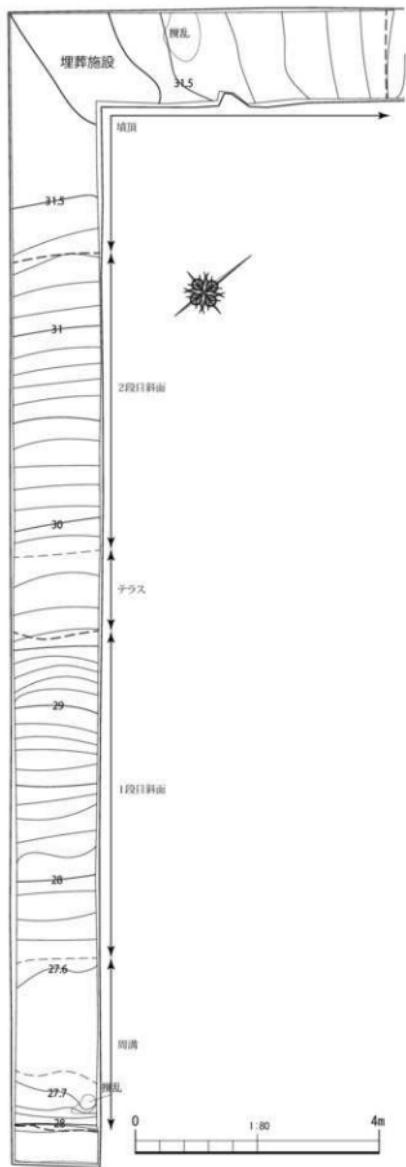
第3項 小結

今回の発掘調査では、生目2号墳の墳丘規模と墳丘形態、墳丘構造の解明を目的とした。ここでは調査で得られた情報を整理し、若干の考察を加えて小結としたい。

2号墳の墳端は、A調査区、B調査区、加えて1号墳A調査区で検出されている。1号墳が位置する墳丘西側は、1号墳を避けるように斜面長を短くしているため、墳形は正円を呈さず、西側が潰れた歪な形状となる。これらの情報を基に墳丘径を復元すると、南北30m、東西27mになる。墳端から墳頂までの高さは、A調査区で3.5m、B調査区で3.9m、1号墳A調査区で4.4mを測る。旧地形の標高が高い西側に向かうほど墳頂との比高差があるが、1号墳とのバランス上、意図して明瞭に周溝を掘り込んだ可能性が指摘できる。段築は前述のとおり2段築成で、斜面途中に1段平坦面を有する。斜面幅は1m程度であり、標高約30m前後の位置に造り出されている。1段目平坦面の設置位置は、B調査区の検出状況や、生目古墳群の他の古墳の平坦面の検出状況から、地山削り出し面の最



第55図 生目2号墳A調査区土層断面図 (S=1/40)

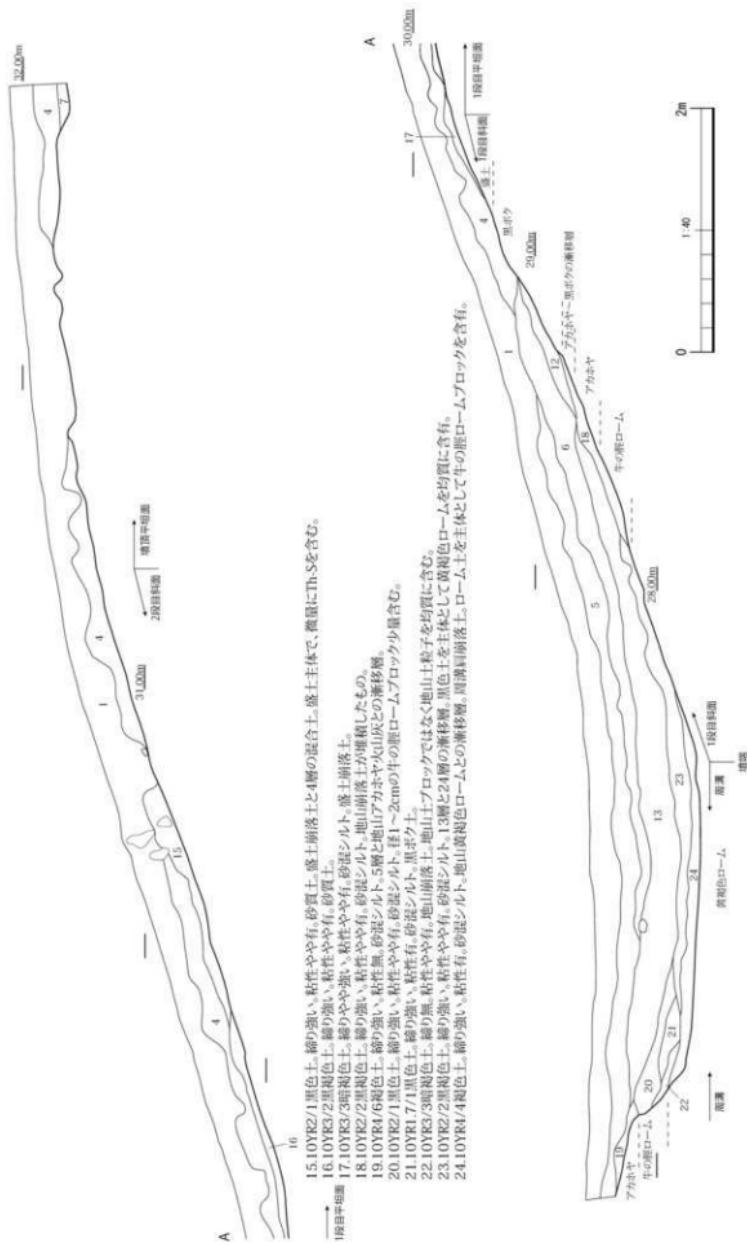


第56図 生目2号墳B調査区平面図 (S=1/80)

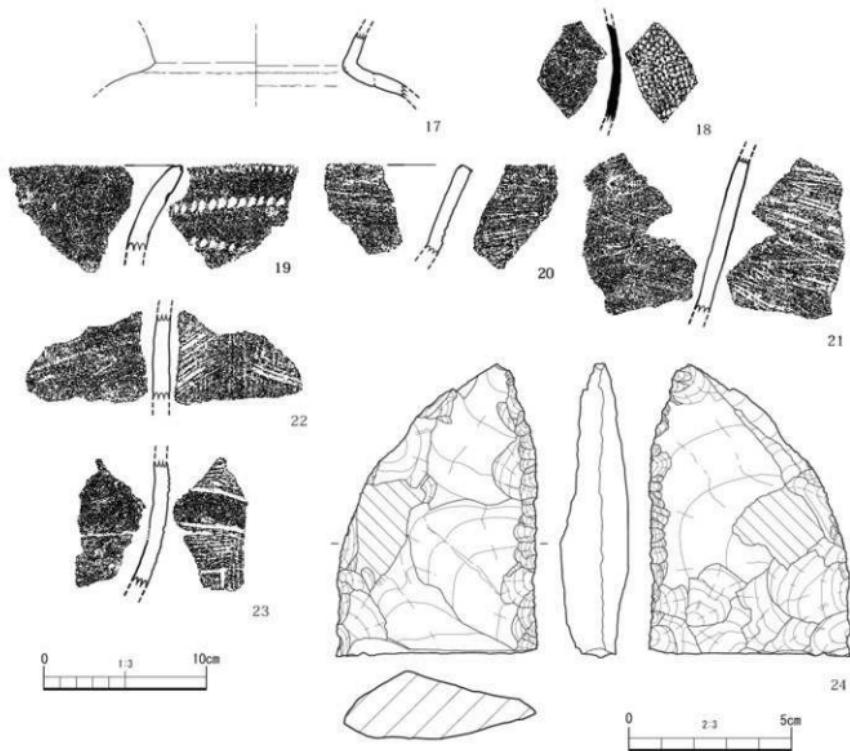
上部に合わせ位置を決定していると考えられる。2号墳の場合、東に向かうにつれて地山の標高が下がっていくため、B調査区では20cm程度の盛土、A調査区では60cm程度の盛土を施した後に、平坦面を作出している。斜面長に関しては、A調査区とB調査区において違いはみられるが、斜面長比は概ね1:1に近い数値を示す。

2号墳では墳頂において埋葬施設と思われる落ち込みを検出した。検出に止めているため内部構造は明らかではないが、短軸が1.3mしかない点、古墳築造後に陥没が生じたと考えられる検出状況から、木棺直葬である可能性が最も高い。長軸方向は調査区外に伸びているが、検出位置から想定すると、墳頂平坦面のほぼ中央に、東西方向に主軸をもって埋葬されている。隣接する1号墳は地中レーダー探査の結果から、南北方向に長軸をもつ墓坑を有している可能性があることから、2号墳とは異なる方向を指向していることになる。1号墳の場合は発掘調査による確認ではないという前置きは必要であるが、隣接し時期も近接するであろう両墳の埋葬施設の主軸方位が異なることは、その背景も含め注目すべき事例である。

2号墳の築造時期を示す遺物は17の土師器壺が唯一可能性がある。形態から直口壺と思われるが、口縁部や胴部を欠くため、位置付けが困難である。ただし、頸部から肩部内面に粘土紐接合痕が目立つなど粗雑化の傾向が見られるものの、頸部から口縁部に向け比較的強く開く形態を維持していることから、中期までは降らず、前期内に取まる可能性が高い。2号墳は立地や墳丘形態から1号墳と同時に計画が成されたと想定されることから、1号墳と相前後する



第57図 生目2号墳B調査区土層断面図 (S=1/40)



第58図 生目2号墳出土遺物実測図 (S=1/3・1/2)

時期の築造と考えられ、ここからも前期末に位置付けられる可能性が示唆される。

平成5年度に生目古墳群周辺遺跡2-2トレンチとして2号墳近接地が調査された際に、生目古墳群で初めて地下式横穴墓（生目1号地下式横穴墓）が検出された。この地下式横穴墓は堅坑を半裁しており、2号墳に向かって玄室が掘り込まれていることが明らかになっている。また、堅坑周辺がテラス状に窪むことから25号墳（報告書では旧3号墳）の周溝と切り合っている可能性が指摘されている。周辺遺跡の調査では、詳細なトレンチ配置図がないため2-2トレンチの正確な位置を落とすことができないが、今回の発掘調査において、2-1トレンチ、2-3トレンチの位置が明らかになったことで、2-2トレンチの概ねの位置が判明した。さらに25号墳の周溝位置が復元できたことから、生目1号地下式横穴墓は、2号墳を意識したものではなく、25号墳の周溝外縁立ち上がりを利用して構築された地下式横穴墓であることが明らかになった。

第4節 生目24号墳、25号墳、26号墳の調査成果

第1項 生目24号墳、25号墳、26号墳の概要

生目24号墳は2号墳の北東側、丘陵端に位置する。指定は円墳であるが、現況では西側が大きく削平され崖面となっている。生目25号墳は、24号墳の南東側に隣接し丘陵端部に位置する。円墳の指定であるが、東側は大きく削平され崖面となっており、墳丘の6割程度が失われている。26号墳は25号墳の南に近接し、丘陵端部に位置する。指定は円墳であるが、墳丘南側の大部分が削平されており、崖面となっている。3基すべて墳丘の残存状況が悪く、丘陵先端部という眺望に優れた立地や、1号墳、3号墳の薬研堀に代表されるように、中世の改変が丘陵全体で見られることから、中世の櫓台である可能性なども視野に入れ、発掘調査をおこなった。

第2項 生目24号墳の調査成果

(1) A調査区

24号墳の現況における中心と25号墳の現況における中心を結んだ線に沿って、大径木を避けながら設定した調査区である。調査区は25号墳にも及んでいるが、ここでは24号墳に関する記述をおこなうことにする。25号墳部分も合わせた調査面積は 20.25 m^2 である。調査区の中央北東側で『史跡生目古墳群周辺遺跡発掘調査報告書』内において2-1トレチとして報告された調査区が検出された。

調査の結果、墳丘端、周溝が検出された。周溝は25号墳の周溝と接しているが、切り合い関係は判然とせず、上位埋土は両墳で共有することから、近接する時期に築造され周溝が掘削されたものと考えられる。周溝幅は1.6mを測る。墳丘は基底部から 34° で立ち上がり、上部に向かうに連れドーム状に角度を緩めるが、これは墳丘流出のためと思われる。基底部から0.7mまでは地山削り出し、それより上部は盛土によって構築されている。残存する墳丘高は1.3mである。

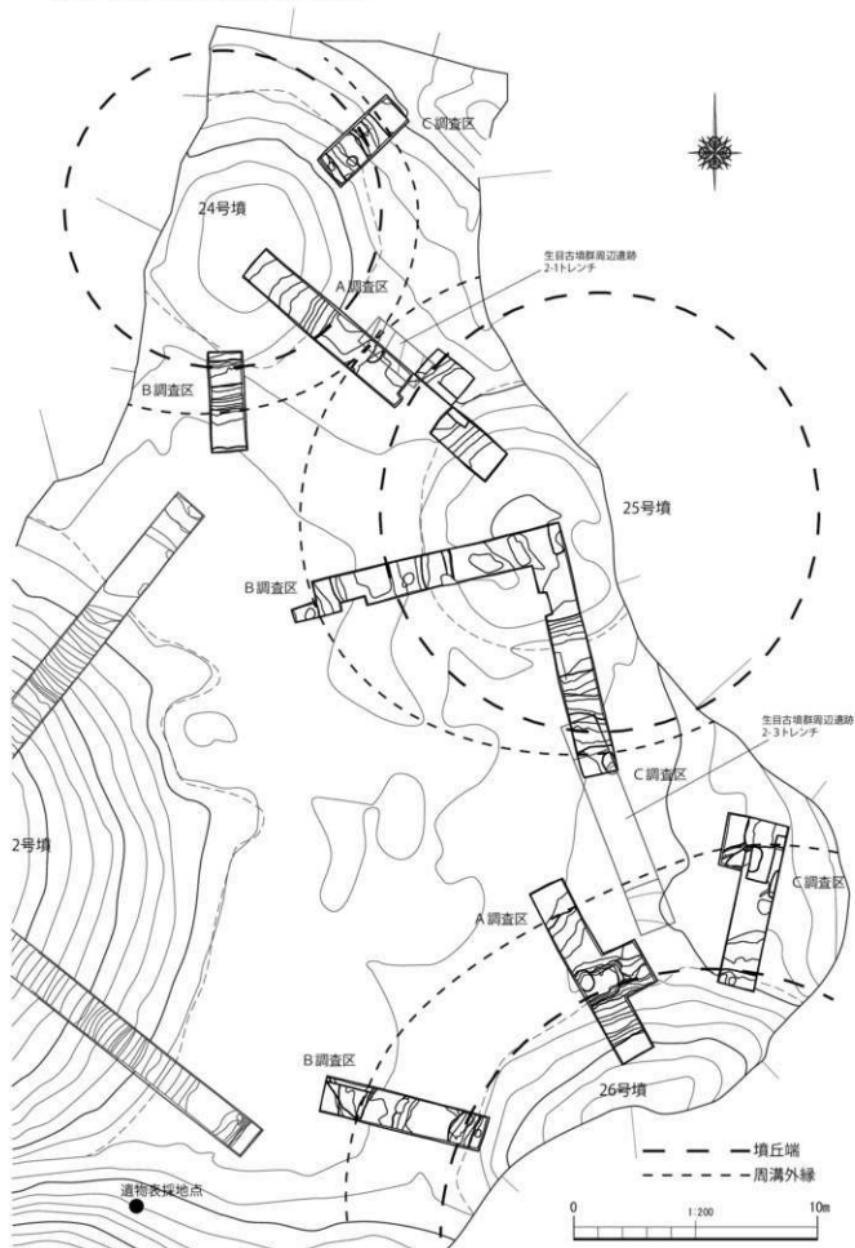
(2) B調査区

A調査区の南西側に墳丘端、周溝の状況を確認するために設定した調査区で、調査面積は 6.1 m^2 である。

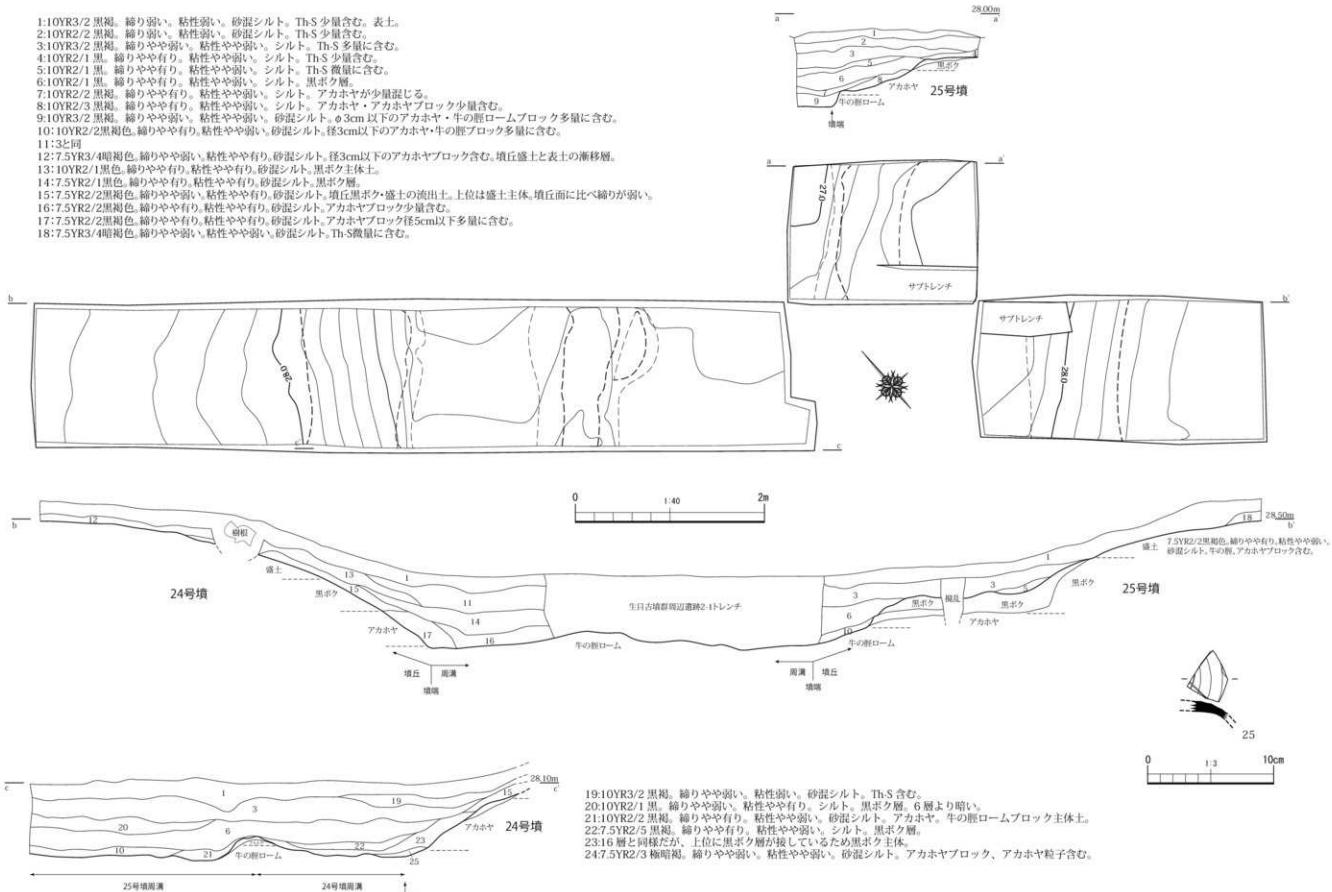
調査の結果、墳丘端、周溝が検出された。周溝横断面形状は、A調査区で検出された周溝と異なり、周溝外縁側が深く掘り込まれる形状である。周溝幅は1.7m、外縁肩部までの深さは0.5mを測る。周溝下位は墳丘、周溝外縁の流出土が堆積しており、古墳構築後比較的早い段階に下位が埋没し、その後黒ボク土が生成、堆積したと考えられる。墳丘は基底部から 34° で立ち上がり、調査区内においては地山削り出し部のみ検出した。周溝外縁側は、肩部として捉えた明瞭な傾斜変換点より外側に向かっても緩やかに上界傾斜しているが、周辺地形との明瞭な変換点が見られないため、盛土確保のための漉き取りによるものと判断した。

(3) C調査区

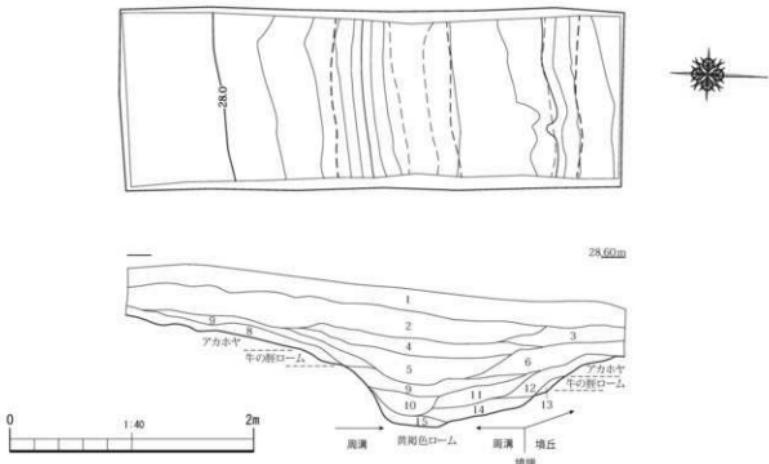
A調査区の北東側に墳丘端、周溝の状況を確認するために設定した調査区で、調査面積は 5.9 m^2



第59図 生目24号墳、25号墳、26号墳測量図及び調査区配置図(S=1/200)



第60図 佐賀24号墳・25号墳A調査区平面図・土層断面図(S-1/40)及78出土遺物実測図(S-1/3)



- 1:7.YR3/3暗褐色。縮り弱い。粘性弱い。砂質土。Th S含む。表土。
 2:7.YR2/3黒褐色。縮りやや弱い。粘性弱い。砂混シルト。
 3:7.YR2/3極暗褐色。縮りやや弱い。粘性弱い。砂混シルト。微量にTh S含む。
 4:10.YR2/1黒色。縮りやや有。粘性やや弱い。砂混シルト。黒ボク土層。基本層序IV層。
 5:7.YR2/1黒色。縮りやや有。粘性やや弱い。砂混シルト。黒ボク土層。基本層序IV層。
 6:7.YR3/3黒褐色。縮りやや弱い。粘性やや弱い。シルト。5層と墳丘流出土の混合層。
 7:7.YR3/3黒褐色。縮りやや弱い。粘性やや弱い。アカホヤ含む。
 8:7.YR3/2黒褐色。縮りやや弱い。粘性やや弱い。砂混シルト。地山アカホヤと黒ボク土の漸移層。
 9:7.YR4/2灰褐色。縮りやや有。粘性やや弱い。シルト。黄褐色ローム、牛の脛ローム、アカホヤ、黒ボク含む。
 10:7.YR2/3暗褐色。縮りやや有。粘性やや弱い。砂混シルト。黄褐色ローム、牛の脛ローム、アカホヤ、黒ボク含む。
 11:10.YR4/4褐色。縮りやや弱い。粘性やや弱い。砂混シルト。墳丘流出土に牛の脛ロームブロック混ざる。
 12:7.YR3/3暗褐色。縮り弱い。粘性やや弱い。砂混シルト。
 墳丘流出土に牛の脛ロームブロック、アカホヤブロック混ざる。
 13:7.5YR3/3暗褐色。縮り弱い。粘性やや弱い。砂混シルト。墳丘流出土にアカホヤブロック混ざる。
 14:7.5YR4/4褐色。縮り有。粘性弱い。砂混シルト。地山黄褐色ローム出土。
 15:7.5YR4/3褐色。縮り有。粘性弱い。砂混シルト。地山黄褐色ローム流出土。

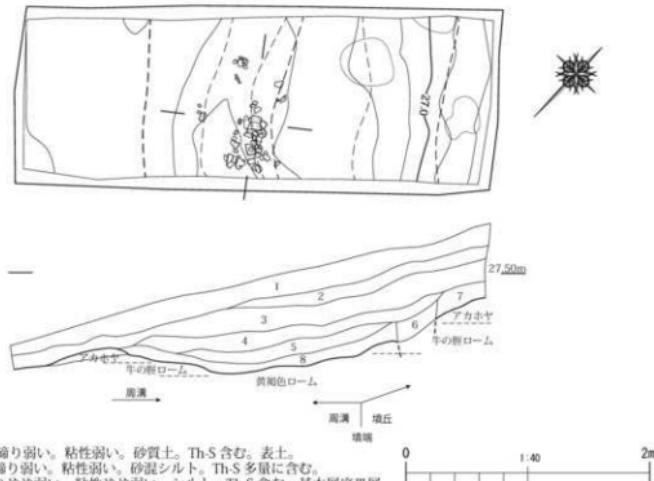
第61図 生目24号墳B調査区平面図、西壁土層断面図 (S=1/40)

m²である。

調査の結果、墳丘端、周溝が検出された。丘陵端部に位置するため、古墳築造位置の地形も下降傾斜しているが、周溝外縁側も周溝を意識し掘り込んでいる。周溝幅は2.0m、深さ0.2mを測る。横断面形状はA調査区で検出された形状に近く、浅い皿状を呈す。墳丘は25°で立ち上がり、調査区内においては地山削り出し部のみ検出した。

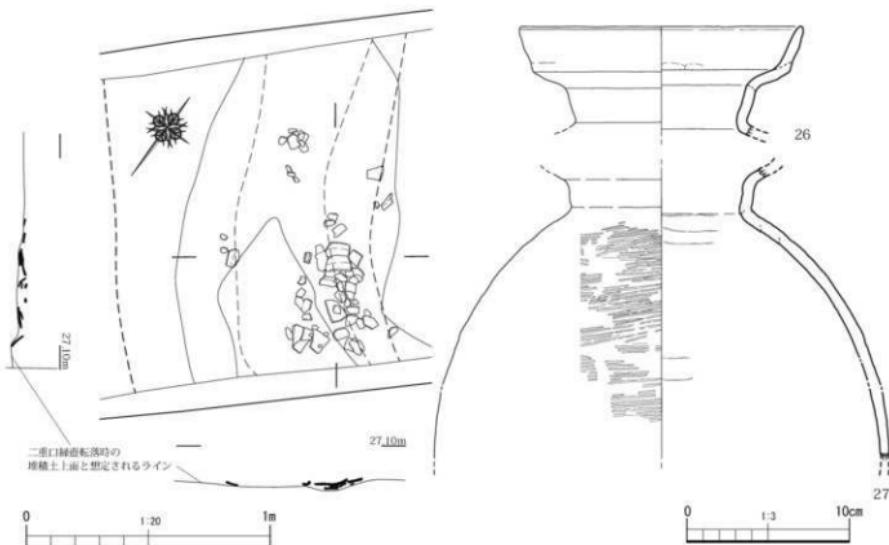
(4) 生目24号墳出土遺物

遺物は二重口縁壺が5層上面付近で出土した。出土状況をみると上部から転落してきたような状況であり、周溝内に埋土がある程度堆積した段階で墳丘上から転落し、周溝内で埋没したと考えられる。26、27は二重口縁壺である。同一個体であるが接点がなかったため個別で実測をおこなっている。胴部外面はタタキ調整で内面には粘土紐接合痕が見られる。胴部最大径が下位に位置する点や一次口縁の屈曲が緩くなっていることから、集成編年4期後半、古墳時代前期末から中期初頭に位置付けられる。

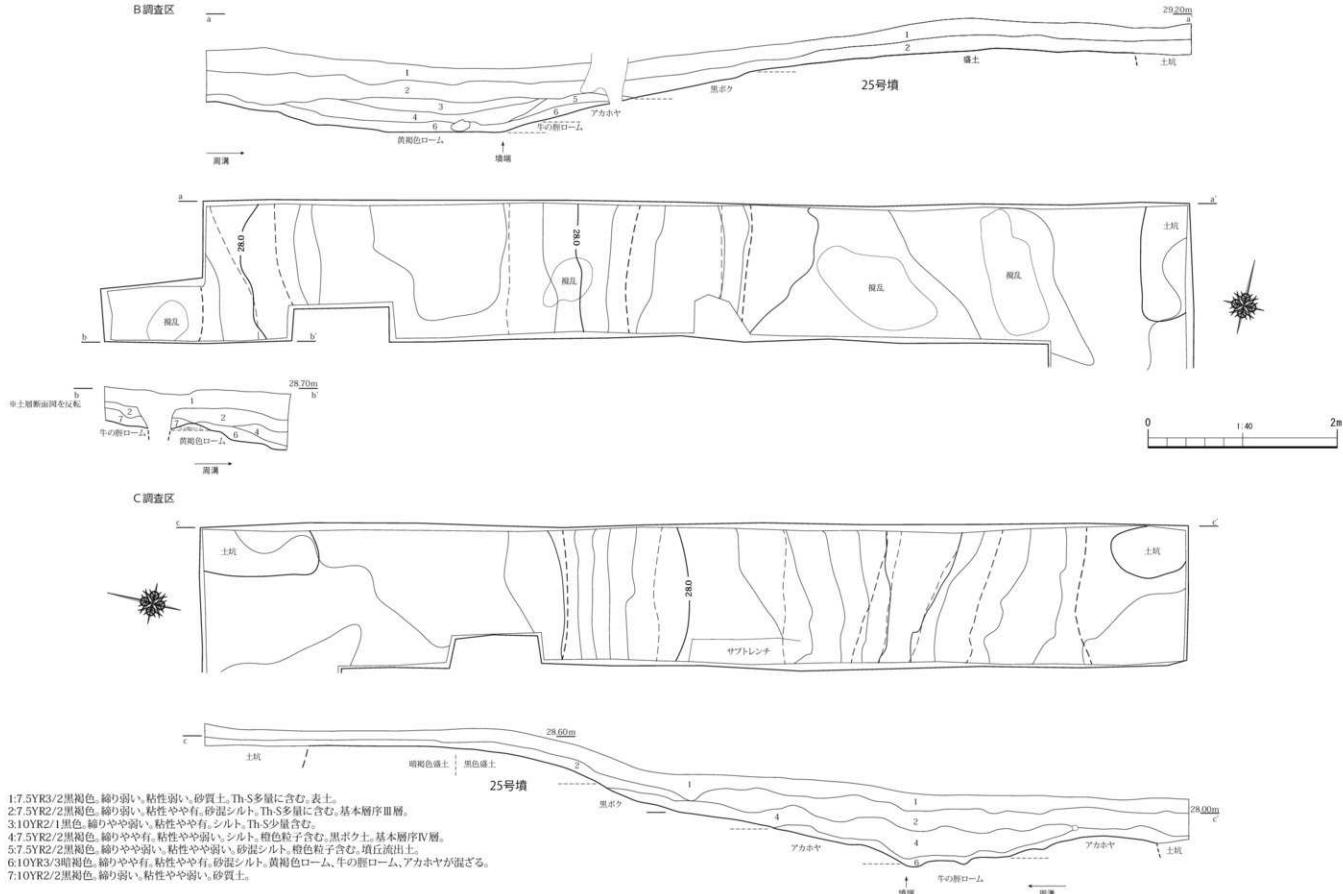


- 1.7.YR3/3 暗褐色。繊り弱い。粘性弱い。砂質土。Th5含む。表土。
- 2.10YR2/1 黒褐色。繊り弱い。粘性弱い。砂混シルト。Th5多量に含む。
- 3.10YR2/1 黒色。繊りやや弱い。粘性やや弱い。シルト。Th5含む。基本層序Ⅲ層。
- 4.10YR2/2 黒褐色。繊りやや弱い。粘性やや弱い。シルト。黒ボク土。基本層序Ⅳ層。
- 5.7.5YR2/3 極暗褐色。繊りやや弱い。粘性やや弱い。砂混シルト。
- 6.7.5YR3/2 黒褐色。繊り弱い。粘性弱い。砂混シルト。径2cm程度のアカホヤ、牛の脛ロームブロック少量含む。樹根による搅乱層。
- 7.7.5YR2/2 黒褐色。繊りやや弱い。粘性やや弱い。シルト。アカホヤ粒子含む。
- 8.7.5YR3/2 暗褐色。繊りやや弱い。粘性やや弱い。砂混シルト。径2cm程度のアカホヤ、牛の脛ロームブロック含む。

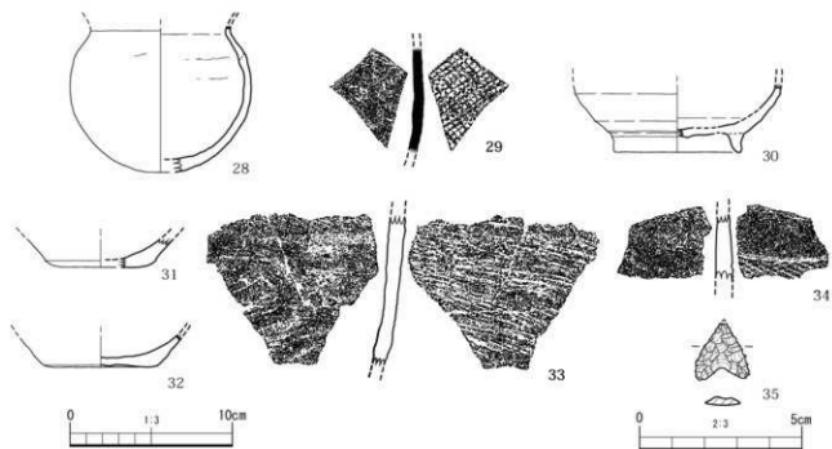
第62図 生目24号墳C調査区平面図、南東壁土層断面図(S=1/40)



第63図 生目24号墳C調査区遺物出土状況図(S=1/20)及び出土遺物実測図(S=1/3)



第64図 生目25号填B調査区及びC調査区平面図、土層断面図 (S=1/40)



第65図 生目25号墳出土遺物実測図 (S=1/3・S=2/3)

(5) 小結

以上の調査成果から、24号墳は径13m、残存高1.3mの円墳であることが明らかになった。墳丘は残存状況はよくないため判然としないが、無段築成と思われる。検出された周溝の断面形状は一様ではないが、これは墳丘盛土を確保するために部分的に掘り込んだことが要因と思われる。時期は墳丘上から転落してきたと考えられる二重口縁壺から、古墳時代前末期から中期初頭の築造と考えられ、北端丘陵群では1、2号墳に統いて造られた古墳に位置付けられる。

第3項 生目25号墳の調査成果

(1) A調査区

24号墳A調査区と一連の調査区である。

調査の結果、墳端、周溝が検出された。周溝は幅2.1mを測り、横断面は浅い皿状を呈する。墳丘は基底部から斜度28°で0.5m立ち上がった後、幅1.2mの平坦面を有し、そこから再び30°の角度で立ち上がる。基底部から調査区内の墳丘最上部までは1.3mを測る。墳丘斜面途中に平坦面を有するため、2段築成のように見えるが、平坦面の直上層がTh-Sを含むため、築造当初の形状ではなく、削平を受けている可能性も想定される。墳丘は下位0.9mが地山削り出し、そこから上位が盛土構築である。

(2) B調査区

A調査区の南側に周溝外縁から現況の墳頂まで設定した調査区である。墳頂でC調査区と結合する。

調査の結果、墳端、周溝が検出された。周溝は幅3.2mを測り、横断面形状は浅い皿状を呈する。墳丘の立ち上がりは他の調査区と比較すると緩く、15°の角度で立ち上がる。墳丘は下位0.7mが地山削り出し、上位が盛土構築である。周溝底面は縄文時代早期遺物包含層である

17.7943 黒色。繩りやや弱い。粘性やや弱い。砂質シルト。TH-S 少量含む。T-S 少量含む。R-K 含む。

2.0YR2/2 黒褐色。繩りやや弱い。粘性やや弱い。砂質シルト。TH-S アコヤブロック微細に含む。T-S 多量含む。R-K 含む。

3.0YR3/4 黒褐色。繩りやや弱い。粘性やや弱い。砂質土。TH-S 少量含む。4. Th-S 敷地に含む。

5.0YR2/2 黑褐色。繩りやや弱い。粘性やや弱い。砂質シルト。TH-S 含まない。黑汚ク層。

6.70 壁に黒褐色。繩りやや弱い。粘性やや弱い。シルト。色調の深い黒ボク層。

8.0YR3/3 に近い。黒褐色。繩りやや弱い。粘性やや弱い。砂質シルト。アコヤ小プロック少量含む。埴丘端部の削れ出し。

10.0YR2/3 黒褐色。繩りやや弱い。粘性やや弱い。砂質シルト。アコヤ小プロック少量含む。埴丘端部の削れ出し。

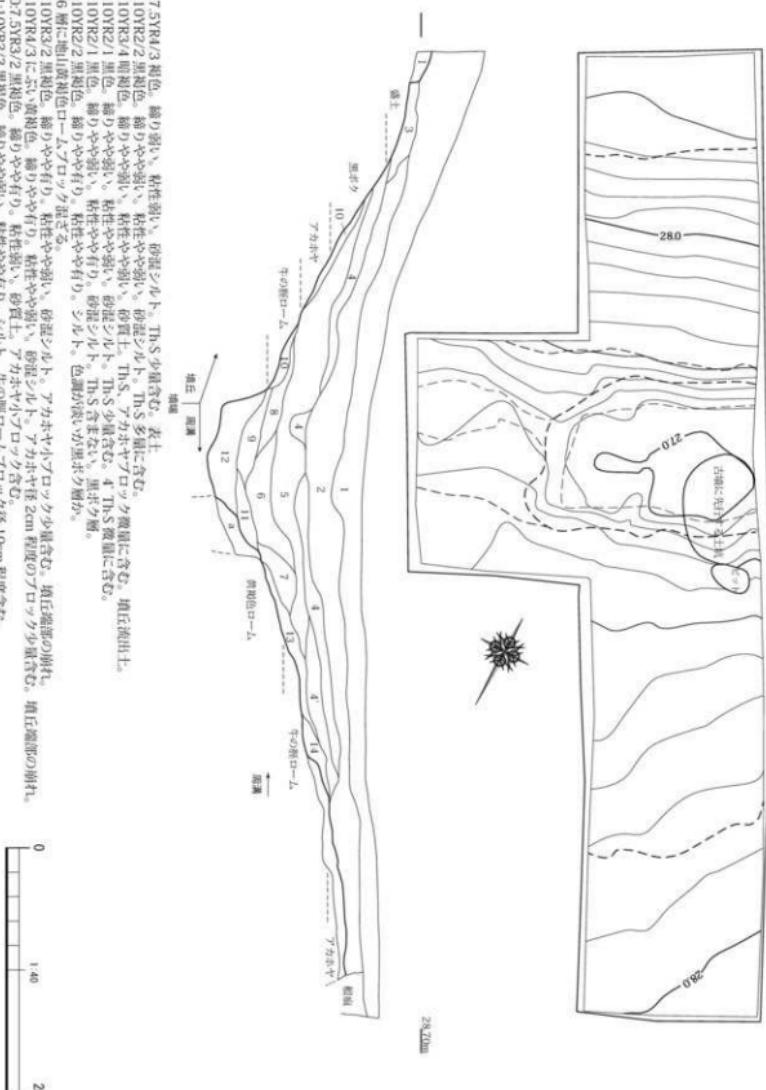
11.0YR4/3 黑褐色。繩りやや弱い。粘性やや弱い。砂質シルト。アコヤ・4.0cm ローブルック厚 10cm 程度含む。

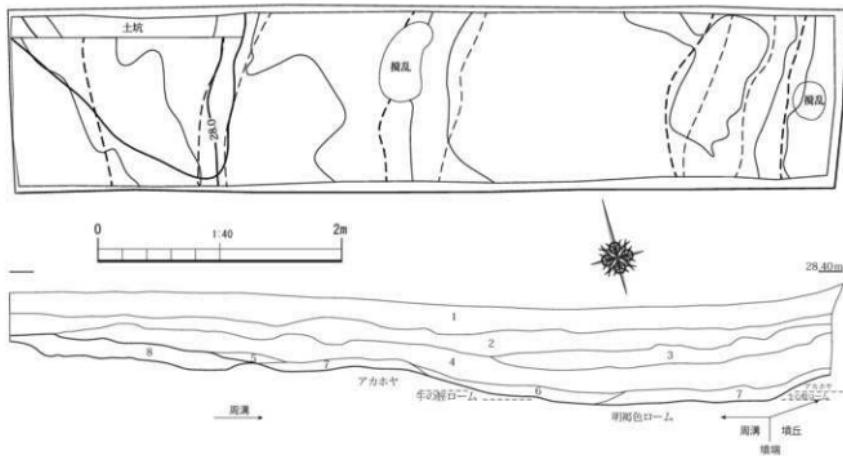
13.0YR2/3 黑褐色。繩りやや弱い。粘性やや弱い。砂質シルト。アコヤ・4.0cm ローブルック厚 10cm 程度のアプロック含む。

14.10YR2/3 黑褐色。繩りやや弱い。粘性やや弱い。砂質シルト。アコヤ・4.0cm ローブルック厚 10cm 程度のアプロック含む。

15.10YR4/2 黄褐色。繩りやや弱い。粘性やや弱い。砂質シルト。古墳に先行する土層の上土。

16.YR4/1 黄褐色。繩りやや弱い。粘性やや弱い。砂質シルト。古墳に先行する土層の上土。





- 1:7.5YR4/2 灰褐色。繊りやや弱い。粘性弱い。砂質土。Th-S 含む。表土。
 2:10YR2/3 黒褐色。繊り弱い。粘性弱い。砂混シルト。Th-S 多量に含む。基本層序Ⅲ層。
 3:10YR1.7/1 黒色。繊りやや有。粘性やや有。砂混シルト。微量に粘性粒子混ざる。黒ボク土。基本層序Ⅳ層。
 4:10YR2/1 黒色。繊りやや有。粘性やや有。シルト。3 層より粒子が繊かい。黒ボク土。基本層序Ⅳ層。
 5:10YR3/1 黒褐色。繊り弱い。粘性やや有。シルト。地山土を斑状に含む。周溝削削時の 8 層流出土。
 6:10YR2/3 黑褐色。繊りやや有。粘性やや有。砂混シルト。少量の地山土が混ざる。
 7:10YR2/3 黑褐色。繊りやや有。粘性やや有。砂混シルト。地山上土ブロック含む。
 8:10YR3/2 黑褐色。繊り弱い。粘性弱い。砂混シルト。地山土ブロック多量に含む。人為的な埋め戻し土の可能性有。別遺構埋土。

第67図 生目26号墳B調査区平面図、北西壁土層断面図 (S=1/40)

ローム層に達しており、周溝内から当該時期の遺物が出土した。A調査区で確認された斜面途中の平坦面は、僅かな傾斜変換点が確認されるに止まった。

(3) C調査区

B調査区に直交する形で設定した。B調査区と合わせた調査面積は 28.89 m²である。

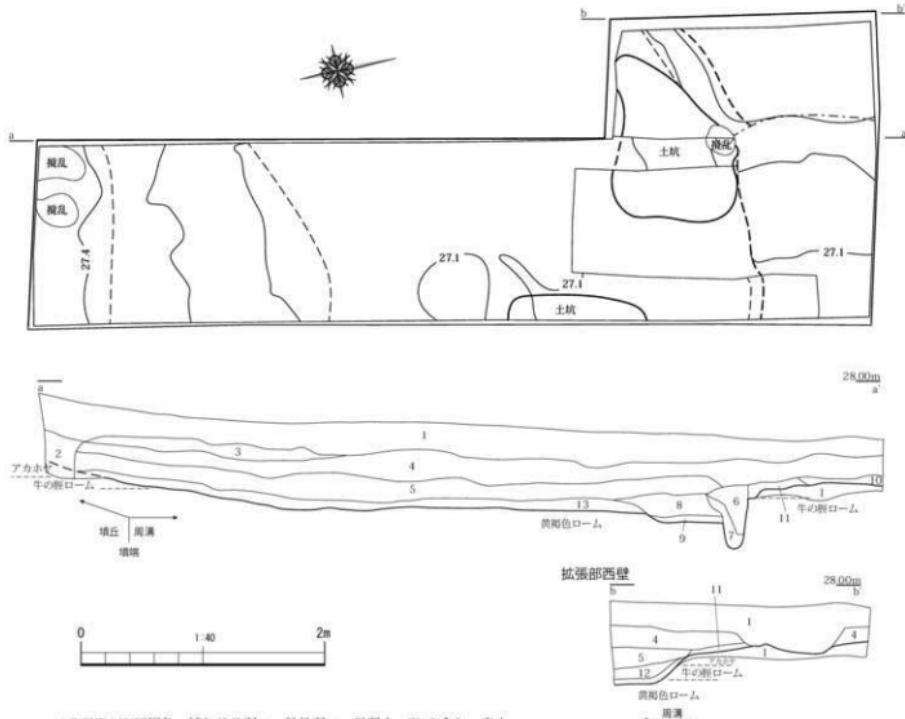
調査の結果、墳端、周溝が検出された。周溝は幅 1.7 m を測り、横断面形状は墳端部が深く、そこから周溝外縁に向かって緩やかに上昇し、周溝外縁肩部の傾斜変換点は明瞭ではない。墳丘の立ち上がりは A 調査区と同様に 28° で立ち上がるが、斜面途中の平坦面は不明瞭であり、僅かに傾斜変換点が確認される程度である。

(4) 生目25号墳出土遺物

28 は墳頂から出土した土器師小型蓋である。墳丘盛土直上からの出土であるが、Th-S を含有する層に覆われていたため原位置を保っている可能性は低い。口縁部を欠くため判然としないが、円球形の胴部や丸底の形態から今塙屋編年Ⅲ期 B 段階であろうか。29 は須恵器である。胴部片のため器種は不明である。30 は土器師高台付塊である。逆三角形状のしっかりとした高台を有する。31、32 は土器師坏で、31 は底部ヘラ切りである。33、34 は縄文土器深鉢である。33 は塞ノ神 B 式土器、34 は塞ノ神 A 式土器である。35 はチャート製の石鏃である。

(5) 小結

3 つの調査区から得られた結果を総めると、墳丘は径 18 m、残存高 1.3 m の円墳である

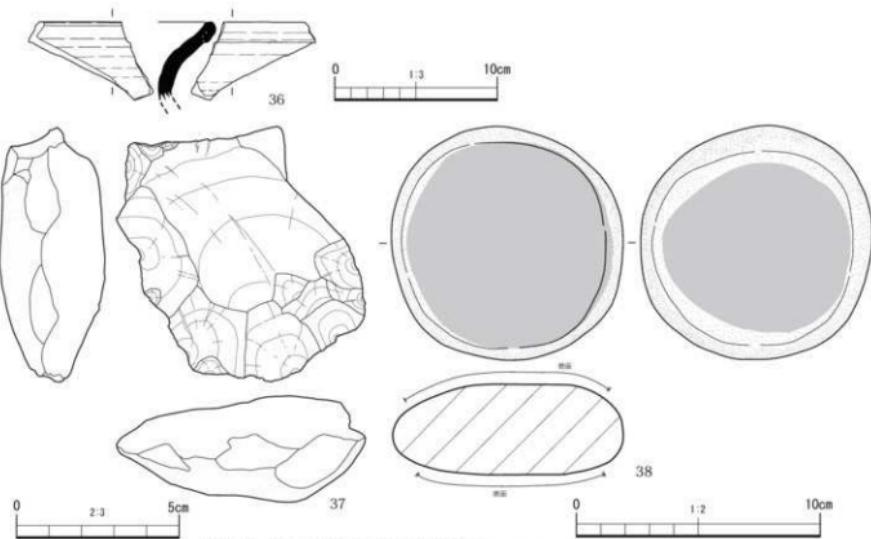


- 1;7.5YR4/2 灰褐色。繊りやや弱い。粘性弱い。砂質土。Th-S 含む。表土。
 2;7.5YR3/2 黒褐色。繊り弱い。粘性弱い。砂混シルト。樹根による擾乱層。
 3;7.5YR2/2 黒褐色。繊りやや弱い。粘性やや弱い。砂混シルト。Th-S 多量に含む。基本層序Ⅲ層。
 4;10YR2/2 黒褐色。繊りやや有。粘性やや弱い。砂混シルト。Th-S 多量に含む。基本層序Ⅲ層。
 5;7.5YR2/1 黒褐色。繊りやや有。粘性やや弱い。シルト。黒ボク土。基本層序Ⅳ層。
 6;7.5YR2/3 極暗褐色。繊り弱い。粘性弱い。砂混シルト。Th-S 含む。樹根による擾乱層。
 7;7.5YR3/1 黒褐色。繊りやや弱い。粘性やや弱い。シルト。樹根による擾乱層。
 8;7.5YR2/2 黑褐色。繊りやや有。粘性やや弱い。シルト。アカホヤ粒子含む。土坑埋土。
 9;8 層に牛の脛ローム、アカホヤ、黄褐色ロームブロックが多量に混ざる。土坑埋土。
 10;7.5YR3/2 黒褐色。繊りやや弱い。粘性やや弱い。シルト。黒ボク土。基本層序Ⅳ層。
 11;7.5YR2/2 黒褐色。繊りやや弱い。粘性やや弱い。シルト。アカホヤが混ざる。
 12;7.5YR2/2 黑褐色。繊りやや有。粘性やや弱い。シルト。
 13;7.5YR3/4 暗褐色。繊りやや有。粘性やや弱い。砂混シルト。埴丘、周溝外縁からの流土。
 1;アカホヤ火山灰層。

第68図 生目26号墳C調査区平面図、西壁土層断面図 (S=1/40)

ことが明らかになった。埴丘の残存状況は良くないが、元々無段築と考えられる。墳頂からTh-Sを含む埋土の土坑を検出した。一部の検出であるが、墳頂の中央付近に位置するため埋葬施設の可能性も想定されたが、埋土にTh-Sを含むことや、墳頂、周溝内から古代から中世の土師器が出土していることから、この土坑も当該期に属するものと判断した。

25号墳の時期は、24号墳との関係性や出土遺物の状況から想定できる程度であり、根拠が薄弱であるが、集成編年5～6期と考えたい。

第69図 生目26号墳出土遺物実測図 ($S=1/3 \cdot S=2/3 \cdot S=1/2$)

第4項 生目26号墳の調査成果

(1) A調査区

残存する墳丘の中心に向かって設定した調査区である。調査面積は 14.96 m^2 である。

調査の結果、墳端、周溝が検出された。26号墳の他の調査区と異なり、本調査区で検出された周溝は一部が土坑状に深くなる。土坑状に深くなった部分の埋土は、墳丘や周溝外縁側からの流出土が主体である。ブロックを多量に含む層もあるが、土坑状に深くなる位置よりも上位層の地山土ブロックのみであり、掘り込み面や下層のブロックが混ざる地下式横穴墓堅坑の埋土とは異なる。墳丘は土坑部分を除くと 21° の角度で立ち上がる。墳丘下位は地山削り出し、上位は盛土構築である。墳丘外縁の立ち上がりは明瞭ではなく緩やかである。周溝外は地山アカホヤ火山灰上に直接 Th-S を多量に含む黒褐色土が堆積しており、本来存在するはずの黒ボク土は失われている。

(2) B調査区

A調査区の南西側に設定した調査区で、調査面積は 10.26 m^2 である。

調査の結果、墳端、周溝が検出された。周溝は幅 4.5 m 、深さ 0.4 m を測る。A調査区と同様に、周溝外縁側の立ち上がりは明瞭ではなく緩やかで、幅 1.2 m のテラス状の平坦面を有する。周溝外縁端部から周溝によって切られる遺構が検出された。遺物が出土しなかつたため判断としないが、黒ボク土とアカホヤ火山灰ブロックを主体とする埋土から、弥生時代の土坑と想定される。墳丘は基底部から 26° の角度で立ち上がる。調査区内では地山削り出し部分のみ確認された。

(3) C調査区

A調査区の北東側に設定した調査区で、調査面積は 12.79 m²である。

調査の結果、墳端、周溝が検出された。周溝は他の調査区と比較すると幅が広く、5.1 mを測る。周溝の床面は平坦で、外縁側は 45°で 20cm 立ち上がる。周溝は尾根先端側である東側に向かうほど立ち上がりが低くなっていることから、先端側は周溝が廻っていなかった可能性が高い。

周溝の立ち上がり部において土坑を検出した。当初はその検出位置や周溝が埋没する過程で掘り込まれている点、外縁肩部において非常に縮りのない土層を検出（板閉塞腐食後の流入土と想定、後に樹根による搅乱と判明）したことから、地下式横穴墓の可能性も想定し、調査区の拡張、サブトレーナによる調査をおこなった。結果として、土坑は 25cm 程度で床面に達し、流入土と想定した土層も樹根による搅乱であることが明らかになったため、地下式横穴墓ではなく周溝埋没過程で掘り込まれた土坑であることが明らかになった。出土遺物はなく、性格も時期も判然としないが、埋土に Th-S を含まない点や、基本層序IV層の黒ボク土に覆われている点から、26号墳が築造されて大きく時間を経ない時期に掘削されたものと考えられる。

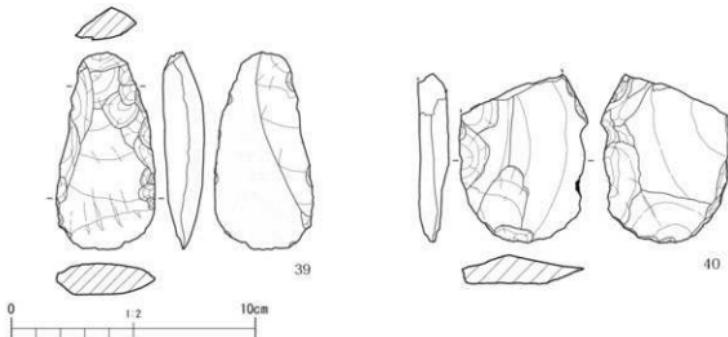
(4) 出土遺物

36はA調査区周溝上層から出土した須恵器甕口縁部である。口縁端部を折り返し、玉縁状を呈す。38はスクレイバーで、刃部の調整が粗雑であることから縄文時代のものと思われる。37は磨石である。

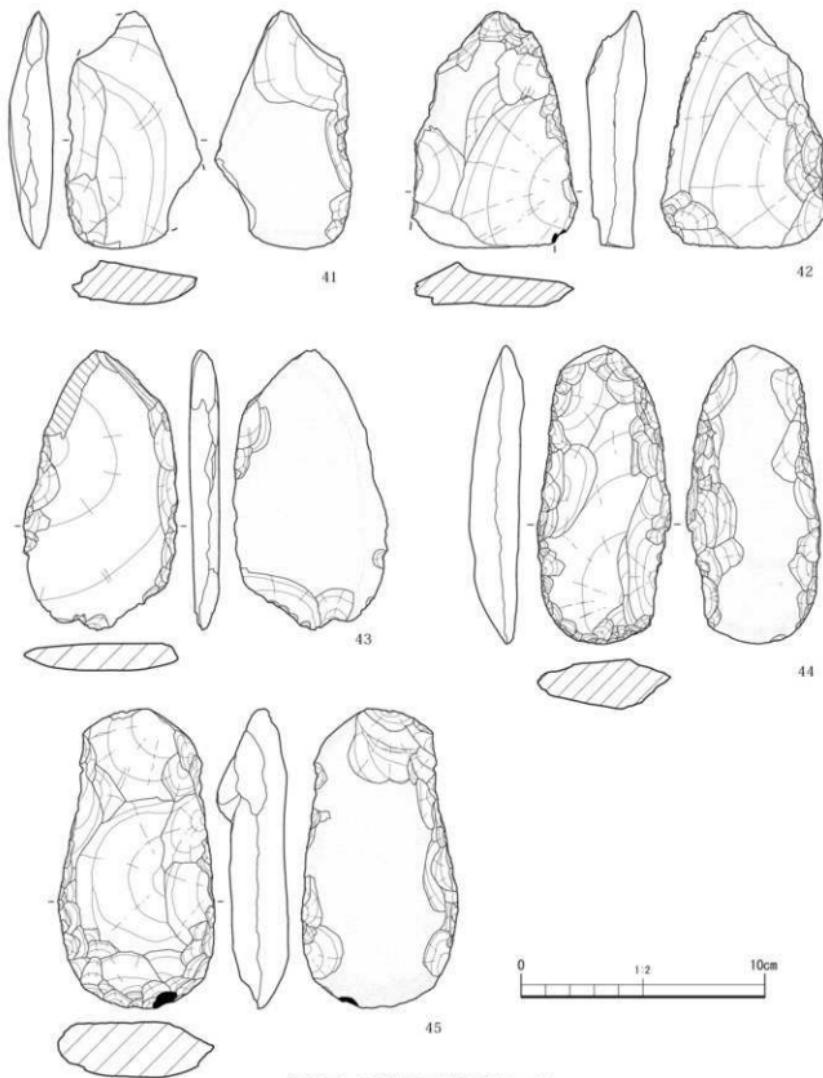
(5) 小結

26号墳は径 26 m、高さ 1.6 m以上の墳丘をもつことが明らかになった。現況では小さな残丘を確認できる程度であるが、本来は 2号墳に次ぐ規模の墳丘を有していたと考えられる。

築造時期に関しては、36の須恵器も周溝上層出土で、確実に26号墳に伴う遺物とは言えない状況にある。また近接する25号墳、2号墳とも周溝を接することがなく、位置関係から想定することも困難である。遺物が出土すること自体が僅少である状況を重視し、36が26号墳に伴うと仮定すれば、TK23型式併行、集成編年8期前半となる。



第70図 表採遺物実測図① (S=1/2)



第71図 表採遺物実測図② (S-1/2)

第5節 表採遺物

39から45は2号墳に近接する斜面（第59図の●）に露出していた打製石斧である。帰属層位は縄文時代早期包含層とみられ、周囲50cm程度の範囲内に所在していたことから、本来は埋納されていた遺物と考えられる。

第3表 出土土器観察表

番號 回収年 月	分類番号	遺構等	埋 置 方 向	法 長 度 (cm)	法 幅 (cm)	高 さ (cm)	色 調 外 面 内 面	統成	調 整		出土(上:mm下:釐)		備考	旁 番 号	
									外 面	内 面	A B	C D	E F		
1	1号埴A Th-S含糊	須恵器 縦	横	10mm/1	10mm/1	良好	灰灰 10mm/1	良好	タタキ後ナデ	当て具底	1 僅			3	
2	1号埴B 南墳丘正	須恵器 縦	横	2.55/1	2.55/1	良好	黄灰 2.55/1	良好	回転ナデ	回転ナデ	1 僅			4	
3	1号埴B 南墳丘正	須恵器 縦	横	10mm/1	2.55/1	良好	灰灰 10mm/1	良好	波線、波状文	横ナデ	1 少			29	
4	1号埴B 南墳丘正	須恵器 縦	横	N7/0	N5/0	良好	灰 N7/0	良好	タタキ、カキメ	当て具底				5	
5	1号埴B 南墳丘正	須恵器 縦	横	10mm/1	10mm/1	良好	灰灰 10mm/1	良好	格子タタキ	当て具底	1 僅			6	
6	1号埴B 南墳丘正	須恵器 縦	横	N5/0	2.55/1	良好	黄灰 N5/0	良好	格子タタキ	当て具底	1 僅			7	
p. 79 第45回	7	1号埴A 泥土器 縦	横	7.5mm/6	7.5mm/6	良好	にらむ根 7.5mm/6	良好	縫、斜め方向の ミガキ	横ナデ	2 少	1 僅		15	
	8	1号埴A 泥土器 縦	横	7.5mm/6	7.5mm/6	良好	にらむ根 7.5mm/6	良好	横ナデ、ミガキ	ミガキ	3 少			12	
	9	1号埴A 無蓋高 Th-S含糊	須恵器 縦	横	7.5mm/4	7.5mm/4	良好	灰灰 7.5mm/4	良好	ラケケツリ義 凹輪ナデ	回転ナデ	3 少			2
	10	1号埴D 深鉢	横	10mm/2	7.6mm/3	良好	灰黄黒 10mm/2	良好	貝殻覆線押し 引文	横ナデ	3 少	1 僅		8	
	11	1号埴D 深鉢	横	10mm/3	7.6mm/3	良好	にらむ根 10mm/3	良好	貝殻覆線押し 引文	ナデ	3 僅	1 僅		9	
	12	1号埴I 黒ボク層	横	2.55/1	10mm/5	良好	灰灰 2.55/1	良好	タタキ	当て具底	3 僅			10	
	13	1号埴I 土師器 环	横	(13.0)	6.25	5.2	にらむ根 5.0mm/6	良好	回転ナデ	回転ナデ	3 僅			1	
	17	2号埴A 周囲	土師器 縦	横	7.5mm/3	7.5mm/3	良好	にらむ根 7.5mm/3	良好	ナデ	ナデ	2 多			14
	18	2号埴B Th-S含糊	須恵器 縦	横	10mm/1	10mm/1	良好	灰灰 10mm/1	良好	格子タタキ	当て具底				18
	19	2号埴 深鉢	横	10mm/2	7.6mm/3	良好	灰黄黒 10mm/2	良好	横ナデ・刺突	横ナデ	2 多	1 多		11	
	20	2号埴A 周囲	土師器 縦	横	7.5mm/4	7.5mm/4	良好	明瞭灰 7.5mm/4	良好	貝殻条痕文	貝殻条痕文	2 多	1 多		16
	21	2号埴A 泥土器 縦	横	7.5mm/1	7.5mm/1	良好	明瞭灰 7.5mm/1	良好	貝殻条痕文	貝殻条痕文	4 多	1 多		13	
	22	2号埴A 盛土直上 縦	横	7.5mm/2	7.5mm/2	良好	灰灰 7.5mm/2	良好	貝殻条痕文	貝殻条痕文	3 多	1 多		17	
	23	2号埴B Th-S含糊	土師器 縦	横	7.5mm/2	7.5mm/2	良好	灰灰 7.5mm/2	良好	燃糸文、沈継	横ナデ	2 多	1 多		19
p. 95-96 第66回	25	24号埴A 周囲	須恵器 縦	横	10mm/1	10mm/1	良好	灰灰 10mm/1	良好	凹輪ケツリ	回転ナデ			線刻	21
	26	24号埴C 周囲	土師器 縦	(17.2)	にらむ根 5.0mm/4	にらむ根 5.0mm/4	良好	にらむ根 5.0mm/4	良好	横ナデ	横ナデ	4 多		27と同一個体	41
p. 98 第63回	27	24号埴C 周囲	土師器 縦	横	にらむ根 5.0mm/4	にらむ根 5.0mm/4	良好	にらむ根 5.0mm/4	良好	ナデ・タタキ	横ナデ	4 多		26と同一個体	42
	28	25号埴 Th-S含糊	土師器 縦	(1.75)	にらむ根 7.5mm/4	にらむ根 7.5mm/4	良好	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	4 少		黒化気味	23
p. 98-99 第64回	29	25号埴B 須恵器 縦	横	2.55/1	10mm/5	良好	灰灰 2.55/1	良好	格子タタキ	当て具底	ナデ	2 僅		22	
	30	25号埴A 周囲	土師器 縦	横	7.5mm/3	7.5mm/3	良好	にらむ根 7.5mm/3	良好	横ナデ	横ナデ・ナデ	1 僅			24
p. 101 第65回	31	25号埴B 环	土師器 縦	(4.7)	にらむ根 7.5mm/5	にらむ根 7.5mm/5	良好	にらむ根 7.5mm/5	良好	横ナデ	横ナデ	2 僅		底部へラ切り	20
	32	25号埴B Th-S含糊	土師器 环	(6.0)	根 5.0mm/6	根 5.0mm/4	良好	にらむ根 5.0mm/6	良好	横ナデ?	横ナデ?	2 僅		楓化著しい、底部へ ラ切り	25
p. 105 第66回	33	25号埴B 須恵器 环	土師器 縦	横	7.5mm/3	7.5mm/3	良好	にらむ根 7.5mm/3	良好	貝殻条痕文	貝殻条痕文	2 多			27
	34	25号埴B 須恵器 环	土師器 縦	横	7.5mm/3	7.5mm/3	良好	にらむ根 7.5mm/3	良好	燃糸文、沈継	横ナデ	5 少			26
p. 105 第66回	36	26号埴A 須恵器 縦	横		5mm/4	5mm/2	良好	灰灰 5mm/4	良好	回転ナデ	回転ナデ	4 僅			28

※地質 A:古崎小石 B:長石 C:輝石 D:角閃石 E:雲母 F:くさり鐵

第4表 出土石器観察表

掲載頁	図番号	揭露番号	遺構等	跡種	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考	旁 番 号
p. 79 第45回	14	1号埴G 調査区		砾石	砂岩	7.90	7.00	2.70	210.5		30
	15	1号埴K 調査区		砾石	尾崎山酸性岩	8.30	8.80	4.30	470.7		35
	16	1号埴K 調査区		砾石	尾崎山酸性岩	10.60	12.20	6.10	1173.6		33
p. 92 第58回	24	2号埴A 調査区周囲	スクリーパー	チャート	砂岩	9.03	6.20	2.10	117.3		45
	25	2号埴A 調査区周囲	スクリーパー	チャート	砂岩	7.75	1.65	0.25	6.5		44
p. 105 第69回	37	26号埴A 調査区周囲	スクリーパー	チャート	砂岩	7.85	7.70	3.25	197.0		40
	38	26号埴A 調査区周囲	スクリーパー	チャート	砾石	9.60	9.50	3.70	515.3		39
p. 106 第70回	39	表抜	打製石斧	ホルンブッシュ	8.10	4.05	1.70	61.1		32	
	40	表抜	打製石斧	ホルンブッシュ	(6.90)	5.25	1.25	52.2		31	
	41	表抜	打製石斧	ホルンブッシュ	9.75	5.60	1.80	97.0		34	
	42	表抜	打製石斧	真岩	(9.70)	6.80	2.45	147.2		42	
	43	表抜	打製石斧	真岩	11.50	6.35	1.20	121.8		43	
	44	表抜	打製石斧	ホルンブッシュ	12.25	5.50	2.25	161.1		37	
	45	表抜	打製石斧	ホルンブッシュ	12.30	6.45	2.95	263.4		36	

第Ⅲ章 総括

第1節 生目1号墳の墳丘

今回の発掘調査をおこなう以前は、生目1号墳の墳丘に関する詳細な検討は、柳沢氏によるもの（柳沢 1995）が唯一と言ってよい状況であった（註1）。ここでは、新規に作成した測量図と発掘調査の成果を基に、生目1号墳の墳丘に関する検討をおこなう。

今回の測量調査、発掘調査成果に加え、原田測量図も参照し作成した生目1号墳の墳丘復元図が第72図である。なお、復元に際しては沼澤豊氏の24単位設計法も参考にした（沼澤 2011）。

墳丘の復元 後円部径は、B、C調査区の調査結果から、南北74mという値が得られた。しかし、東西方向は、同時に計画された2号墳を避けて築造されていることから、径71mとなり正円を描かない。後円部高は、B調査区の墳端標高と墳頂との比高差から13.3mとなる。

前方部に関しては、現況では前面端や側面端が何れも失われているため、原田測量図を基に復元をおこなった。原田測量図では前面端に向かって側面が大きく開く形態を呈しており、前方部前面に丘尾切断の切り通しが確認される。しかし、この丘尾切断の正確な位置は、周辺を含め大きく造成を受けているため現況で把握することは困難である。また、原田測量図と新規測量図を正確に重ね合わせることができないため、復元図の前方部前面端の位置は不確定要素を含むが、前方部長は56m程度に復元される。復元図において後円部の中心と前方部の主軸線がずれているが、発掘調査によって確認された前方部墳頂、1段目平坦面、2段目平坦面の位置からの復元である。このずれは地形的な制約が多い丘陵上に築造されたためと考えられる。

以上の結果から、生目1号墳は、墳長約130m、後円部径南北74m、東西71m、後円部高13.3m、前方部長約56mという規模になる。

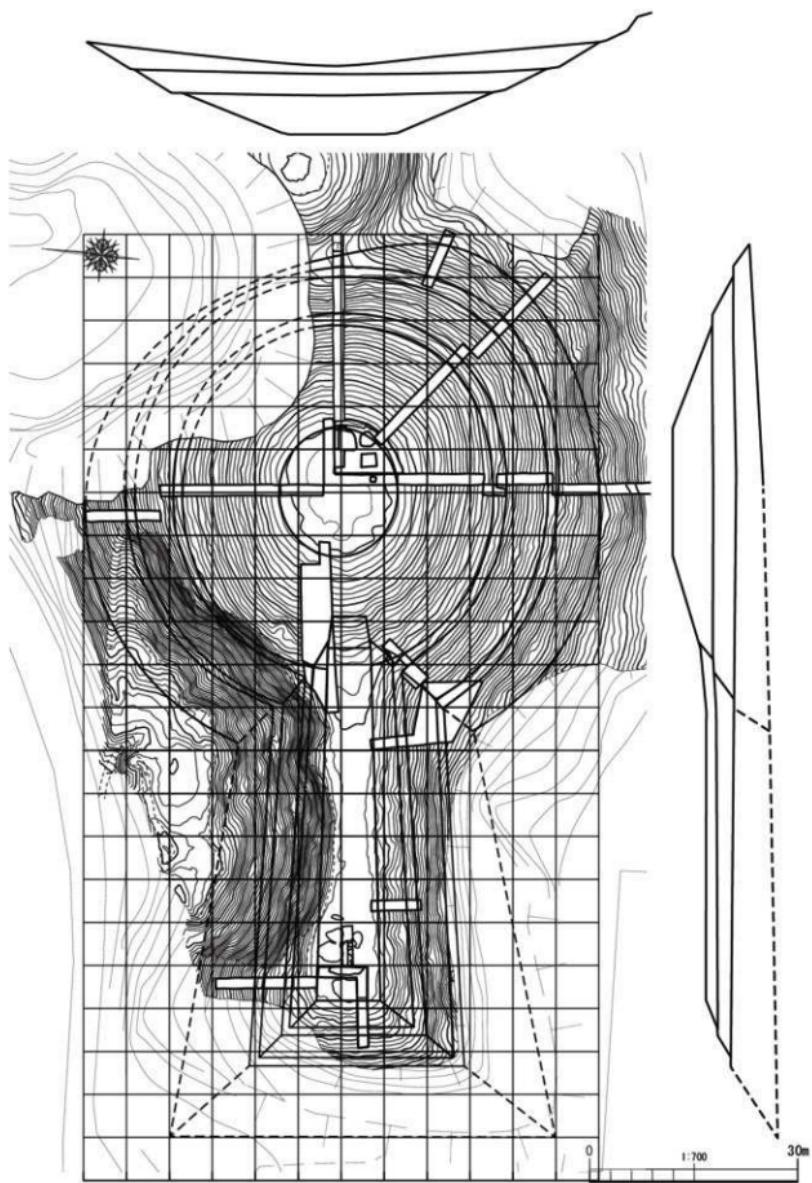
段築構造 墳丘の段築構造は、発掘調査の結果から後円部、前方部共に3段築成であることが明らかになった。後円部と前方部の平坦面は、各々連続して繋がることが確認されている。2段目平坦面は、後円部と前方部において1m程度の比高差があるため、くびれ部付近でその比高差を解消するために前方部平坦面がスロープ状に標高を上げ、後円部平坦面と接続する。1段目平坦面はG調査区において接続部付近が検出できたが、前方部側の残存状況が悪く、接続方法に関しては判然としない。前方部頂と後円部の接続は、前方部頂が隆起斜道となり後円部3段目斜面の途中に接続する形となる。前方部頂は疊敷が施されていないため、後円部3段目斜面との境界は明瞭である。ただし、後円部3段目斜面の葺石にも前方部頂を延長する形で目地が通ることから、葬送儀礼の段階では、当該箇所の葺石が施工されていなかった可能性も想定される。

後円部の墳丘端部の標高を比較すると（第5表）、後円部の歪みに合わせて東側の標高が高くなり、最大3.7mの比高差がある。それに対し、1段目平坦面では、比高差が最大でも0.8mと大きく縮まっており、1段目斜面において比高差を修正している。さらに2段目平坦面では比高差が最大でも0.4mしかなく、非常に高い精度で墳丘が構築されていることがわかる。

第5表 生目1号墳各部計測表

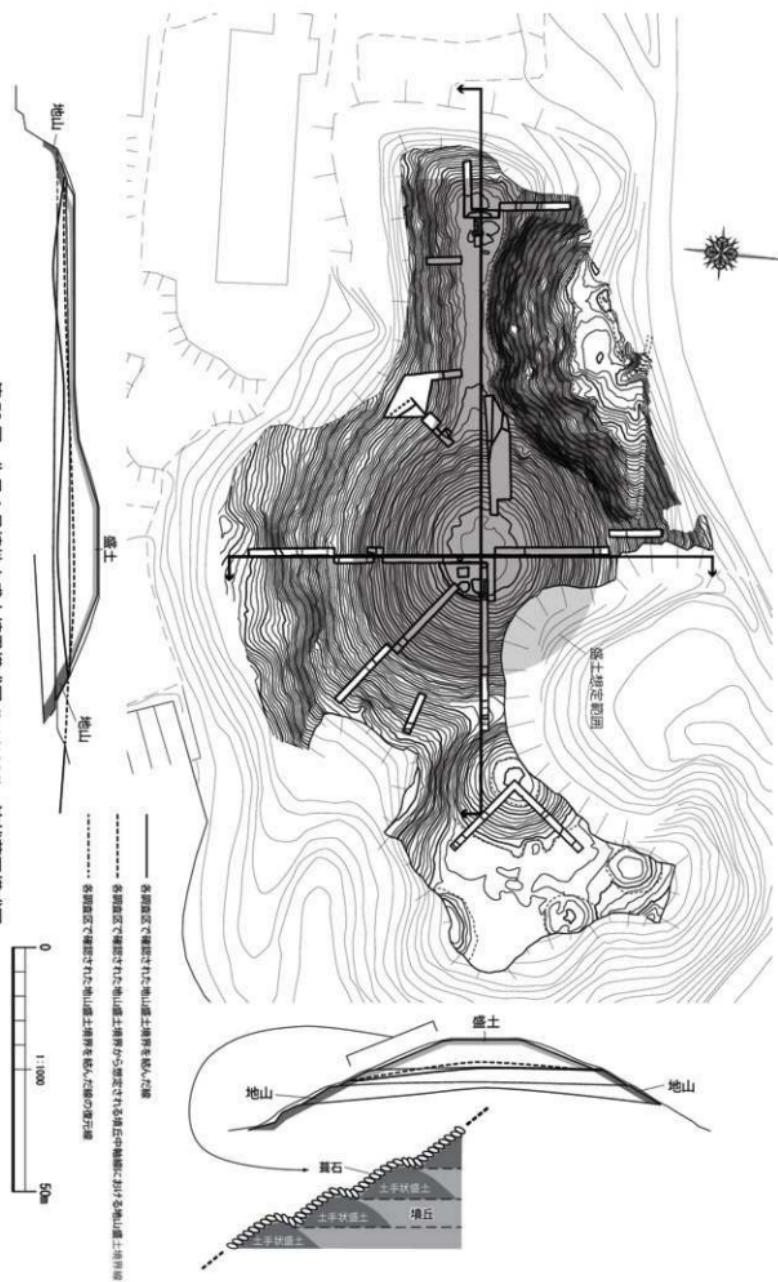
		後円部							
		A調査区	B調査区	C調査区	G調査区	H調査区	I調査区	J調査区	K調査区
墳頂平坦面標高		37.0 m	36.9 m	36.9 m	—	37.0 m	—	—	—
3段目斜面	斜面肩の標高	36.7 m	36.6 m	36.7 m	—	36.8 m	36.7 m	—	—
	斜面裾の標高	31.3 m	30.9 m	30.9 m	—	31.0 m	31.1 m	—	30.9 m
	斜面の傾斜角(上位)	17°	20°	20°	—	13.5°(斜道上)	19°	—	—
	斜面の傾斜角(下位)	26°	26°	24°	—	19°(斜道上)	26.5°	—	—
	斜面長	15.5 m	14.8 m	15.1 m	—	17.1 m	16.0 m	—	—
	葺石	有無	有(波)	有(波)	有(波)	—	有(波)	有(波)	有(波)
2段目平坦面	幅	1.1 m	1.3 m +	1.4 m	—	1.5 m +	1.7 m	—	1.2 m
	石數	有・大	有・少	有?	—	有・少	有・少	—	有・区画有
	斜面肩の標高	31.3 m	30.8 m	30.6 m	—	—	31.0 m	—	30.8 m
	斜面裾の標高	28.2 m	27.4 m	27.4 m ?	27.9 m	—	28.0 m	—	—
1段目斜面	斜面の傾斜角	29.5°	29°	—	—	—	31°	—	—
	斜面長	6.7 m	7.3 m	7.0 m	—	—	6.4 m	—	—
	葺石	有無	有	有	有	—	有	—	有
	分類	C 1 + C 2	C 1 + C 2	—	C 1 + C 2	—	C 3	—	—
	1段目平坦面	幅	1.9 m	1.4 m +	—	1.3 m +	—	1.7 m +	—
	石數	有・少	有・少	有?	—	有・区画有	有・少	—	—
墳丘外平坦面		斜面肩の標高	27.9 m	—	—	27.4 m	—	27.9 m	—
		斜面裾の標高	27.1 m	23.7 m	23.4 m ?	—	—	25.7 m	—
		斜面の傾斜角	38°	38°以下	33°?	—	—	22°	—
		斜面長	1.8 m	6.5 m 前後	7.5 m ?	—	—	—	—
		葺石	有無	有	—	—	有	有	—
		分類	C 1 + C 2	C 1 ?	—	—	—	—	—

		前方部				
		D調査区	E調査区	F調査区	G調査区	H調査区
墳頂平坦面標高		31.8 m	32.0 m	31.5 m	31.5 m	31.8 m
3段目斜面	斜面肩の標高	31.7 m	31.9 m	31.3 m	31.3 m	31.6 m
	斜面裾の標高	30.2 m	30.4 m ?	—	30.1 m	30.8 m
	斜面の傾斜角	21°	22°	28°	27°	22°
	斜面長	3.2 m ?	—	—	3.1 m ?	2.6 m
	葺石	有無	有	—	有	有
	分類	C 2	—	—	C 2	C 1 + C 2
2段目平坦面	幅	0.7 m	—	—	—	1.1 m +
	石數	有・少	—	—	—	有・少
	斜面肩の標高	29.9 m	—	—	—	—
	斜面裾の標高	28.3 m	—	—	27.9 m	—
1段目斜面	斜面の傾斜角	28°	—	—	—	—
	斜面長	3.2 m	—	—	—	—
	葺石	有無	有	—	無?	—
	分類	C 2	—	—	—	—
1段目平坦面	幅	0.8 m	—	—	1.4 m ?	—
	石數	有・少	—	—	—	—
斜面肩の標高		28.2 m	—	—	27.5 m ?	—
斜面裾の標高		—	—	—	—	—
斜面の傾斜角		31°?	—	—	—	—
葺石		有無	有	—	無?	—
分類		—	—	—	—	—



第72図 生目1号墳墳丘復元図 (S=1/700)

第1節 生目1号墳の墳丘



第73図 生目1号墳地山盛土境界模式図 (S=1/1000)、波状墓石模式図

墳丘斜面の傾斜角は、後円部1段目斜面は38°から22°と幅がある。22°を測るのはJ調査区であり、2号墳との関係上短縮されていた1段目斜面が、本来の規格どおりに斜面長を延伸する位置であるため緩斜面になったと考えられる。また38°はA調査区であり、斜面長を短縮した影響とみられ、C調査区、I調査区の残存部分からみると、本来は30°を少し上回る程度の値になるとと思われる。2段目斜面は31°から29.5°を測り、30°前後の値となる。3段目斜面は26.5°から24°で立ち上がり、上位に向かうにつれ20°から17°へと角度を緩める。この角度の変化は屈曲ではなく、徐々に変化するため、3段目斜面は見かけドーム状を呈する。なおH調査区では隆起斜道を検出しているが、その角度は19°であり、後円部3段目斜面に接続後の傾斜角は墳頂平坦面付近で13.5°と他の箇所より緩傾斜である。前方部に関しては残存状況が悪く、D調査区以外は数値が明確ではないが、後円部と同様に3段目斜面が緩傾斜となる。

後円部の斜面比に関しては、本来の規格を保っていると思われるB、C調査区で得られた値を平均すると、下段から概ね1:1:2になり3段目の比率が高い。都出比呂志氏による近畿中央部地域の前方後円墳における段築成の指摘（都出1992）や沼澤氏の3段目ノリ面長と墳頂平坦面の変化に関する指摘（沼澤2011）を参考にすると、古墳時代前期でも時期が降ると後円部3段目斜面の比率が増大し、墳頂平坦面が縮小する傾向にある（註2）。

墳丘の構成 後円部1、2段目の傾斜角は30°前後でほぼ等しく、3段目斜面の傾斜角だけが緩い状況にある。その要因として、生目1号墳は墳丘1、2段目のほとんどが地山成形、3段目は盛土によって構築されているためと考えられる（第73図）。狭小な尾根上に立地する関係上、広範囲から盛土を集めることが難しく、盛土は丘陵下位で多量に得られるシラスを主体としている。シラスは砂質で粘性がないため、急角度で積み上げることが困難であることから、3段目斜面の角度が緩くなったと考えられる。

第2節 生目1号墳の葺石

今回の発掘調査によって、生目1号墳の後円部では非常に良好な状態で葺石が遺存していることが明らかになり、葺石の構築方法を詳細に観察することができた。ここでは葺石構造の諸特徴を示し検討をおこなう。

葺石の分類 葩石の分析は、近年複数の研究者によって成されているが（青木2003、廣瀬2008、山田2004、塙治2008、細川2010）、断面構造を基準とした分類が主体である。ここではこれらの研究の中でも葺石の技術的特徴によって明快に分類をおこなっている廣瀬氏の分類（廣瀬2011）に従って検討を進めることにする。生目1号墳の葺石は、その大部分が廣瀬分類C類の範疇に含まれる。ただし、明確な基底石をもたずに葺石を積み上げていく箇所も複数見られ、生目1号墳における構造的特徴として把握できることから、本報告書では便宜的にC類の中で基底石を有するものをC1類、基底石を有さないものをC2類とする。また、基底石より上位の葺石が基底石上に載らずに、基底石背面から積み上げられる施工方法も確認された。斜面よりも大振りの石を最下段に使用するという意識がみられることから、C類の変容形と捉えられるためこれをC3類とする。このC3類は生目3号墳、22号墳、14号墳の一部、西都原100号墳、173号墳、46号墳など日向地域内において多数確認でき、西都原100号墳の報告

書では「この根石（基底石）は縦の長軸方向を墳丘に平行させ、斜面部から1段外側の位置に置くことにより、斜面部の葺石の加重を支えられるような配置の工夫が見受けられる」と報告されている（括弧内加筆）。このような配置となった要因は、西都原100号墳で報告された機能的要因に加え、比較的緩い墳丘傾斜角と、基底石と斜面葺石とのサイズ差が大きいにも拘らず、裏込めによる調整をおこなわずに葺石を構築したため生じたと考えられる。各調査区で確認された葺石の状況を見ると、C1類とC2類、C3類が、縦方向の区画石列、もしくは目地で区画された施工単位毎に混在する状況が見られる。また、くびれ部に設定したK調査区では廣瀬分類のB2類も確認された（第5表）。葺石施工技術の差異は、施工をおこなった作業集団の差と考えられ（佐藤2015）、ここから生目1号墳の葺石構築にあたり、技術系譜が異なる複数の作業集団が携わっていたと考えられる。また、1号墳では基底石の有無に加え平坦面外縁に配置された区画石列の有無でも作業集団の差を認識することができる。以上のように、生目1号墳の葺石施工に関しては異なる技術系譜をもった複数の集団が従事しており、その施工にあたって施工方法の統一を図っていないことが明らかになった。同一古墳において複数の葺石構築技法が見られる事例は、京都府五塚原古墳、元稲荷古墳、大阪府玉手山7号墳、将軍山古墳でも確認されていることから、多数の労働力が必要である規模の大きな古墳においては一定量存在すると思われる。

縦方向区画の意義 上記のとおり、生目1号墳の葺石は縦方向の施工単位を重視し、基底石や平坦面外縁端の区画石列の配置に関して全体的な統一をおこなっていない。また、M調査区で確認された墳頂部における葺石施工位置の不統一も加味すると、縦方向の施工単位を越えた連携がなされていないことが明らかである。1号墳の特徴として、平坦面の疊敷きにおいても斜面から一連で縦方向の石列や目地による区画が確認できることから、段築を跨いで施工区画が配されていた可能性が高い。縦方向の区画石列の機能について、廣瀬氏は「作業単位の分割という機能を兼ねていた蓋然性もあるが、第一義的には石材が広範囲にわたって滑り落ちうとする力を分散させる効果を期待して配置されたものとみるべき」と述べている（廣瀬2011）。葺石崩落の連鎖を防ぐ目的であれば、平坦面の疊敷に区画石列は必要ないが、1号墳では作業単位の分割という機能が優先され平坦面にも区画がなされたのではないかと考える。

波状葺石 唯一、縦方向の施工単位を超えて共有される構築技法が、主に後円部3段目斜面で検出された「波状」、「階段状」を呈する横方向の作業単位である。縦方向の施工単位を越えて共有、つまり異なる作業集団において共有された施工方法であることから、葺石施工上の必要条件であったと考えられる。この波状葺石が確認された範囲が、盛土によって墳丘が構築された範囲と重なることから、墳丘盛土に関する施工方法と考えられる。保存を優先し葺石、墳丘の断ち割りをおこなわなかったため想定となるが、波状葺石の検出状況から、葺石内側には土手状の盛土単位が存在すると思われ、階段状ではなく細かな円弧が連続するような状況で検出されていることから、盛土の表面を直線的に整形せずに葺石を施工したと考えられる（第73図）。この土手状盛土の内側の盛土に関しては、現状で検討する術はないが、内側の盛土まで連動して構築していれば「墳丘構築時施工型」、葺石施工に合わせて墳丘盛土表面に土手状盛土を構築していた場合は「墳丘構築後施工型」（細川2010）となる（註3、4）。

第3節 生目1号墳の位置 付け

出土遺物については明確に1号墳の時期を示すものではなく、手掛かりとなるのは墳丘形態と葺石である。

墳丘は、後円、前方部共に3段築成であるが、この墳丘形態を有する古墳の中で、発掘調査によって最も遡る時期が与えられているのは、近畿中央部では集成編年2～3期の玉手山3号墳、南九州では集成編年3期の西都原13号墳である。そのため、それらを大きく遡ることは考え難く、集成編年3期以降の築造と考えられる。また、1号墳は後円部墳頂平坦面が縮小傾向にある。大王墓級の古墳では、集成編年4期前半の渋谷向山古墳の段階で後円部墳頂平坦面の

葺石は、後円部3段目斜面において特異な構築方法がみられるものの、基底石に着目すると廣瀬分類C類が中心であり、南側くびれ部においてB2類が確認されたことも合わせると、集成編年3期から4期前半までに位置付けられる（廣瀬2011）。

以上の状況から、生目1号墳は、現状では一番多くの要素が合致する、集成編年4期前半、4世紀後葉に位置付けることが妥当と思われる。

集成編年4期前半という位置付けは、生目古墳群では22号墳と併行することになる。1号墳は遺物による位置付けではなく、22号墳は発掘調査の途上にあるため暫定的ではあるが、集成編年3期の3号墳を含め、近接した時期に3基の大型古墳が築造されたことになる（第74図）。各々地形的に区分される位置に築造されており、3系列の首長墓と理解することもでき、その場合は今回報告をおこなった4基の円墳が1号墳と同一の群として捉えられる。

南九州全体に目を向けると、この段階の大型前方後円墳として宮崎県高鍋町持田1号墳が挙げられる。持田1号墳は墳長120mで、生目1号墳と比較するとやや小規模であるが比肩し得る存在であり、生目3号墳のような隔絶性は失われている。

以上、ここまで検討により、生目1号墳は以前よりも時期を新しくし、4世紀後葉・古墳時代前期末に位置付けられた。ただし、その位置付けは相対的な評価によるものに依拠していることから、今後新資料が得られれば、再度検討が必要である。

采集编年	丘陵北端群	北部(丘陵北半)	南部(丘陵南半)
1			
2			
3		● 9号埴 3号埴	● 21号埴 (36幅)
4	● 1号埴 ● 2号埴 ● 24号埴		● 22号埴 (35幅) ● 14号埴 (39幅)
5		● 11号埴 ● 12号埴 (46幅)	● 43号地 ● 38号地
6	● 25号埴		● 43号沼泽
7		● 19号埴 ● 8号地	● 41号地 ● 46号地 ● 17号埴 ● 37号地 50号地
8	● 26号埴	● 7号埴 ● 18号地 ● 7号地	
9		● 24号埴 ● 21号地 ● 17号地	
10			● 16号埴 ● 19号埴

は時期比定の根拠が弱いもの

□は導入と想定されるが未開発の地下式橋の範囲 ■は土壤系であるが道路が未登録な地下式橋の範

⁸ は土壤系と想定される頸毛頭森の地下式繩文遺跡。

第74図 生目古墳群主要古墳・主要地下式横穴墓変遷図

【註文】

註1：生目1号墳の調査中におこなわれたシンボジウムの際に、齊藤直文氏が1号墳を西宮山型に位置付け、墳長125mに復元している（齊藤2015）。

註2：生目古墳群内では3号墳の後円部斜面比が、下段から概ね1:1.1:1.5であり、ここから1号墳が3号墳に後出すると考えることもできる。しかし墳丘の段落ち構造が後円部、前方部共に3段である1号墳と、後円部3段、前方部2段である3号墳を同じ堆上で比較することには注意が必要である。西都原古墳群では後円部、前方部3段構成の系譜と後円部3段、前方部2段の系譜が存在することが指摘されており（北都2005）。別の系譜として墳丘の変化を検討する必要がある。また、近畿地方の事例をそのまま適用することも危険であり、細川氏は1:1:2の比率の古墳として、京都府五塚原古墳、元脇古墳を挙げているが（郡出2015）、両古墳は3世紀後半段階に属すると考えられている。地域内の整理が必須であり改めて検討したい。

註3：通常の横方向の作業単位に関しては、1号墳の1、2段目斜面においても日地として確認できる他、生目3号墳では日地や大型石材の配陣から判別できる。特に3号墳前方部前面のJ調査区では横方向の作業単位（大型石材の配置による）の上下で縱方向の区画石列の位置が逆ており、作業中断位置であることが明らかである。生目古墳群以外では、西都原13号墳で存在が指摘されている他、奈良園谷や笠置觀音から100号墳、46号墳でも存在が想定される。他地域に日を向けると熊本県平尾6号墳、大阪府御冢車塚古墳、京都府鶴谷東1号墳など複数の古墳で確認でき、作業単位としての横方向の区画は一般的なものであったと考えられる。ただし、上記古墳の場合、平原6号墳では作業上の基準と石材の安定性を確保するため、鶴谷東1号墳では斜め方向の区画石列配置の基礎（横方向の区画石列の上下で施工方法が異なる）と機能的用途が想定されるようあり、区分して考える必要がある。

註4：乾草暮西山古墳では貴石貴面に継ぎ貼りの厚い裏込め土を水平に積みながら、それに合わせて表面の貴石を積み上げている箇所がある。細川氏の「埴丘構築後廻工型」に分類されるが、仮に貴石貴面の斷ち割りが不十分であると「埴丘構築時廻工型」に誤認されるような事例であり注意が必要と思われる。

【参考文献】

- 齊木 敦 2003 「貴石構築法とその変化」『古墳施設の研究』—埴丘からみた古墳の地域性—。六一書房。
- 齊木 敦 2015 「古墳における埴丘と埋葬施設」『古墳時代の地域間交流』3、九州前方後円墳研究会。
- 有馬義人 2006 「南九州における前期古墳編年の検討」『前期古墳の再検討』九州前方後円墳研究会。
- 一瀬和夫 2011 「古墳と埴丘」『埴丘構築と葬式祭り』古墳時代の考古学3、同成社。
- 堀岡洋道 2003 「3・生目古墳群」『吉野平野の古墳と古墳群』第29回九州古墳時代研究会（宮崎県大会）資料集、九州古墳研究会。
- 梅本康広 2015 「6 長岡京跡古墳1000 流」『50周年古墳6次』『長岡京』ほか、向日市埋蔵文化財調査報告書第102集、向日市教育委員会、公益財団法人向日市埋蔵文化財センター。
- 堀塚琢磨 2008 「貴石から見た古墳の一種相」『真朱』第8号、財団法人徳島県埋蔵文化財センター。
- 栗林誠治 2006 「前期古墳の埴丘と貴石施設—吉野川下流域・河口域を中心に—」『真朱』第8号、財団法人徳島県埋蔵文化財センター。
- 河野裕次 2017 「宮崎県の様相—吉野平野南部を中心で—」『九州における古式土解説』九州前方後円墳研究会。
- 齊木直彦 2015 「日向における音長墓の動向とその背景」『日向における官長墓の動向とその背景』表題要旨集、宮崎県立西都原考古博物館。
- 齊木 直 2015 「元脇古墳の貴石の特色」『元脇古墳の研究』向日丘陵古墳群調査研究報告第2回、公益財団法人向日市埋蔵文化財センター。
- 高橋克典 1999 「西寺山古墳の葺石」『前嶽の三ツ塚』可児市教育委員会。
- 高橋克典 2005 「古墳の葺石」『文化論叢』Ⅲ、奈良文化財研究会創立30周年記念論文集、奈良国立文化財研究所、
- 齊木比呂志 2012 「古墳の埴丘・埴土の型式」『古墳時代の研究』7、古墳1 墓丘と内部構造、雄山閣出版。
- 齊木比呂志 2015 「元脇古墳の発掘とその意義」『元脇古墳の研究』向日丘陵古墳群調査研究報告第2回、公益財団法人向日市埋蔵文化財センター。
- 長瀬宗彌 1992 「第9回 日向『南方位後円墳集成』九郎編、山川出版社。
- 長瀬宗彌 1995 「②日向」『九州における古墳時代長髪の動向』九州考古学会・宮崎考古学会合同会議実行委員会。
- 沼澤 翁 2011 『日本古墳の構造研究』早稲田大学。
- 野間重季 1993 「第2回 第7節 85 生目古墳」『宮崎歴史』資料編考古2、宮崎県。
- 橋本達也 2010 「九州南部の官長墓と貴石墓以外の墓制」『九州における官長墓と貴石墓の再検討』九州前方後円墳研究会。
- 東 淑華 1997 「第4回 第3節 五 大庭川下流部」『宮崎歴史』通史編、原始・古代1、宮崎県。
- 圓蔵 譲 2003 「貴石」『五塚原古墳第1・2次発掘調査概報』立命館大学文学部学生課題研究報告第10回、立命館大学文学部。
- 圓蔵 譲 2006 「貴石の成立・展開と地域間交流」『吾々の考古学』和田清吉先生還暉記念論叢刊行会。
- 圓蔵 譲 2011 「⑤貴石と段築成」『埴丘構築と葬送祭礼』古墳時代の考古学3、同成社。
- 織田晋太郎 2010 「貴石構築にみる二つの様相」『繼子三ツ塚古墳群の研究』大手前大学文学研究所・繼子三ツ塚古墳調査団、
- 北郷泰道 1995 「日向『全国古墳築成』雄山閣出版。
- 北郷泰道 2005 「西都原古墳群」同成社。
- 三好博香 2001 「古墳の景観」『京都府埋蔵文化財論集』第4集、(財)京都府埋蔵文化財調査センター。
- 柳沢一男 1995 「日向の古墳時代官長墓とその演進」『宮崎歴史研究』第9号、宮崎県。
- 柳沢一男 1997 「第1章 9 宮崎市内の古墳」『宮崎県史叢書』宮崎県前方後円墳集成、宮崎県。
- 柳沢一男 1999 「古墳時代日向の王と生目古墳」『浮かび上がる宮崎平野の古大古墳』生目古墳群シンポジウムII資料集、宮崎市教育委員会。
- 柳沢一男 2003 「南九州における古墳の出現と層級」『前方後円墳通過周縁域における古墳時代社会の多様性』九州前方後円墳研究会。
- 柳沢一男 2011 「南九州の出現期古墳」『都萬台因時代の南九州と近畿』ふたみかみ都萬台因シンポジウムII、香芝市二上山博物館の会「ふたかみ史遺会」。
- 柳沢一男 2014 「南九州の出現期古墳」『都萬台因時代のシニギニ』東九州、青出版社。
- 柳沢一男 2015 「南九州古墳時代の層級」『横浜古墳とヤマト王権のつながり』～日本列島南端の海上交流の歴史～、第30回国民文化祭大崎町実行委員会。
- 山田俊輔 2004 「前期古墳の葺石」『川東牽引古墳の研究』美作地方における前方後円墳構造の構造的研究Ⅰ、吉備人出版。



写真図版



図版 1



①生目 1号墳A調査区全景（南東から）
②生目 1号墳A調査区全景（東から）
③生目 1号墳A調査区墳端から 1段目平坦面（南東から）
④生目 1号墳A調査区 2段目平坦面（北東から）
⑤生目 1号墳A調査区 3段目斜面（北東から）



①生目1号墳A調査区

56号地下式横穴検出状況（西から）

②生目1号墳A調査区

56号地下式横穴竪坑土層断面（北から）

③生目1号墳B調査区3段目斜面（南東から）

④生目1号墳B調査区2段目平坦面（南から）

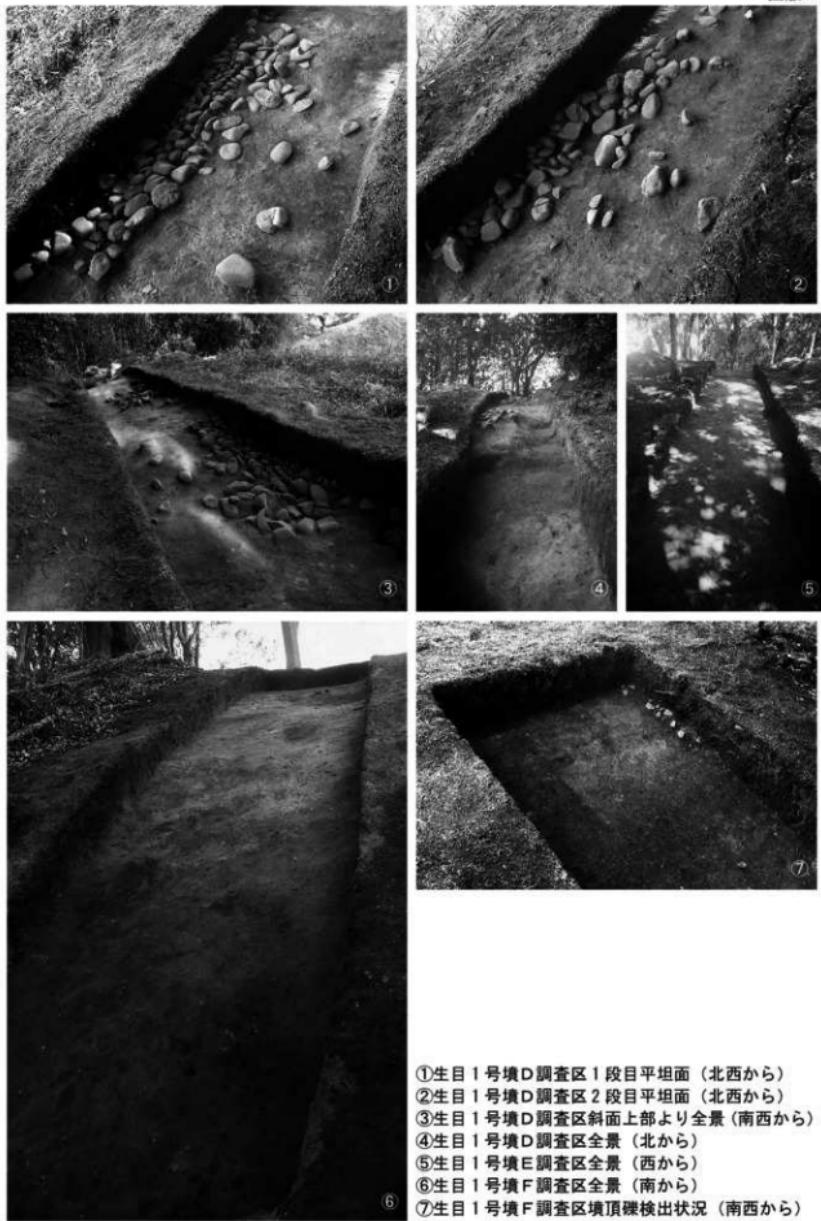
⑤生目1号墳B調査区1段目平坦面（南西から）

⑥生目1号墳B調査区墳端（南東から）

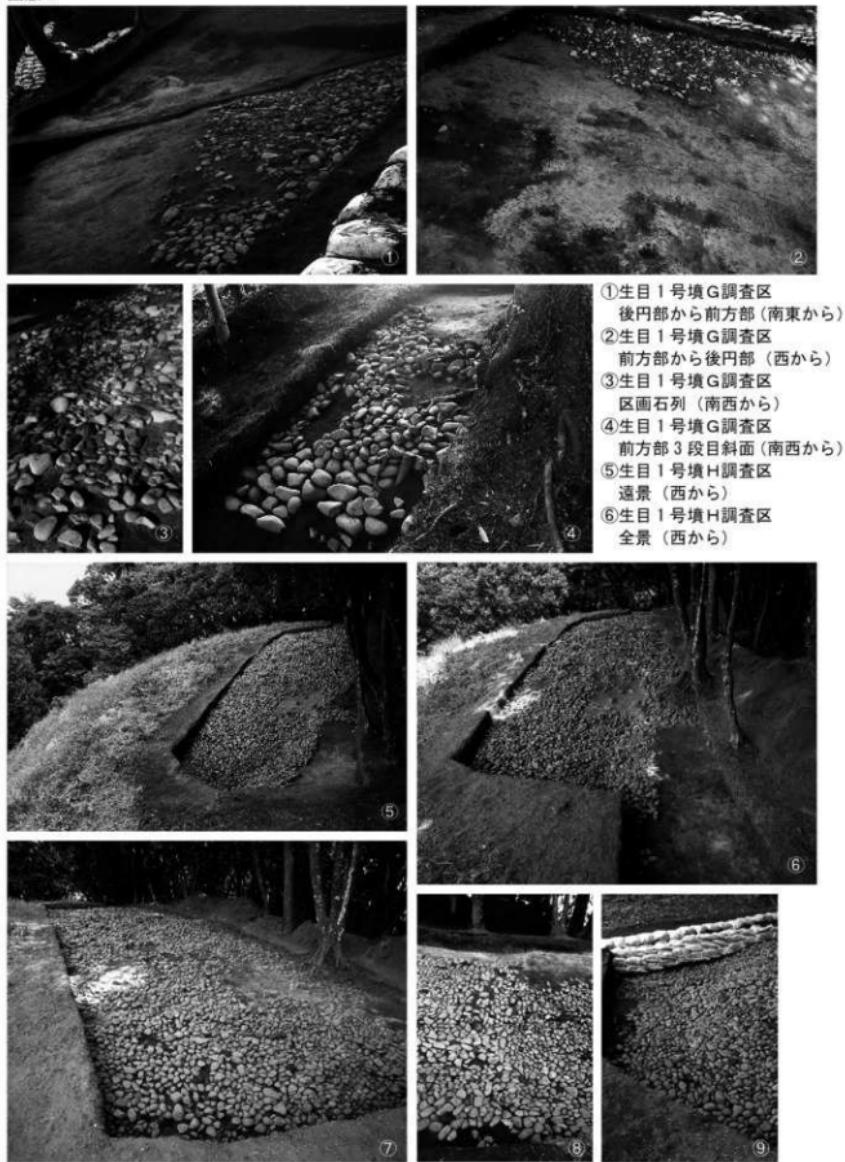
図版 3

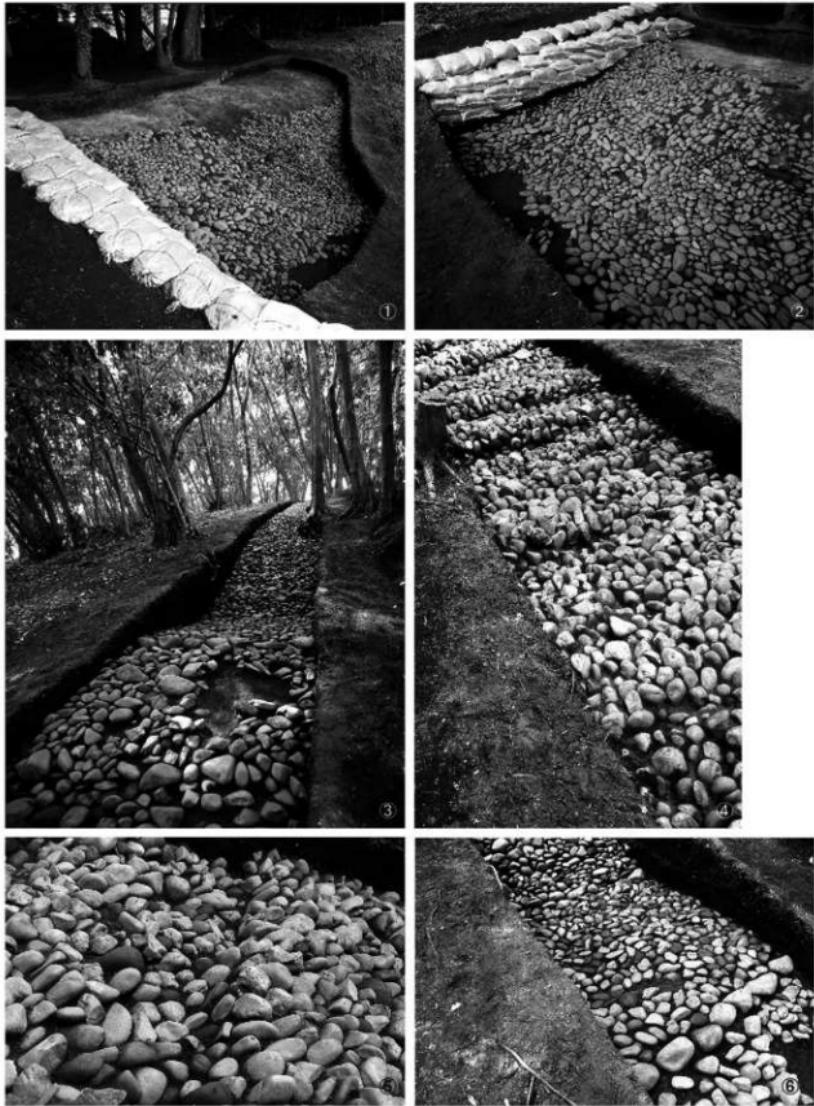


①生目 1号墳 B調査区 墓丘外切岸 (南から)
②生目 1号墳 C調査区 3段目斜面 (北西から)
③生目 1号墳 C調査区 墓頂平坦面 (北西から)
④生目 1号墳 C調査区 1、2段目斜面 (北から)



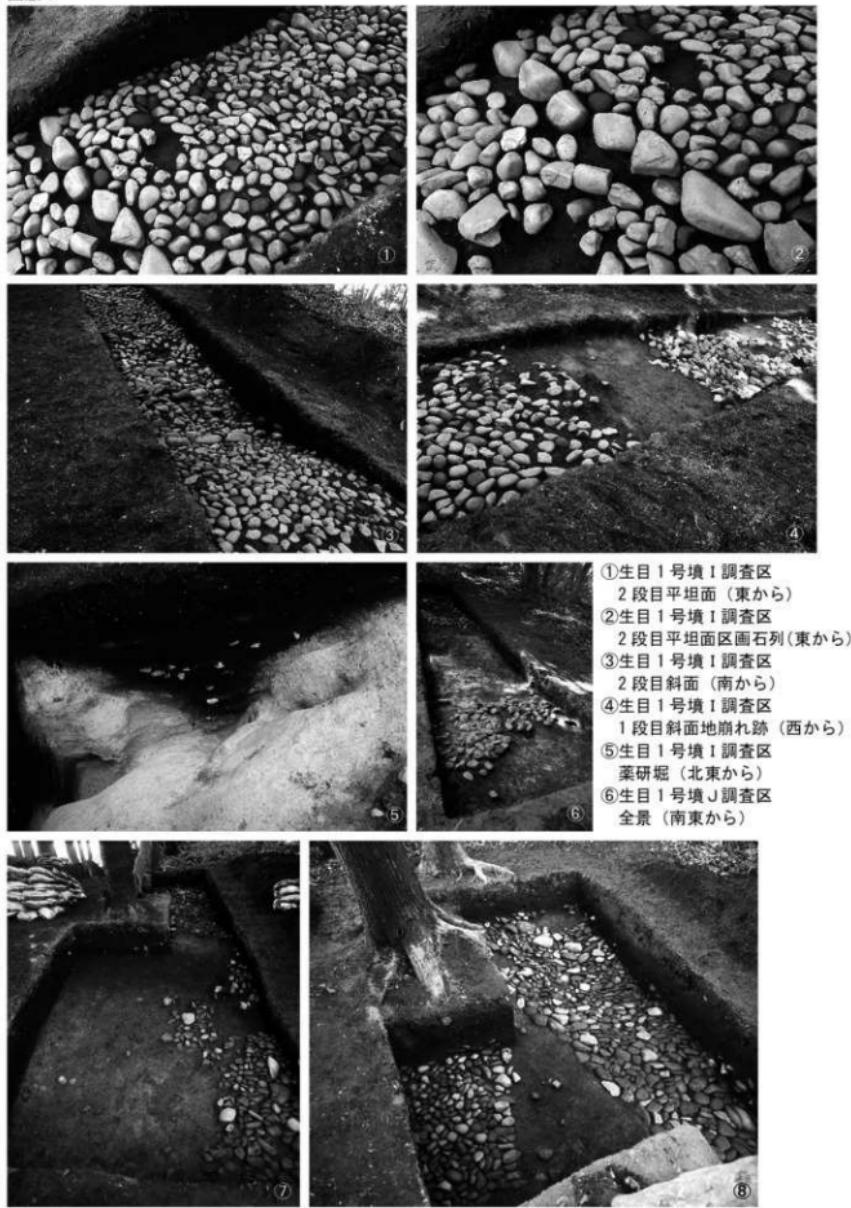
図版 5





①生目 1号填 H調査区拡張部全景（北東から）
 ②生目 1号填 H調査区拡張部全景（北西から）
 ③生目 1号填 I調査区 2段目斜面から 3段目斜面（東から）
 ④生目 1号填 I調査区 3段目斜面波状葺石斜面上から（北西から）
 ⑤生目 1号填 I調査区 3段目斜面波状葺石（南西から）
 ⑥生目 1号填 I調査区 2段目平坦面（南から）

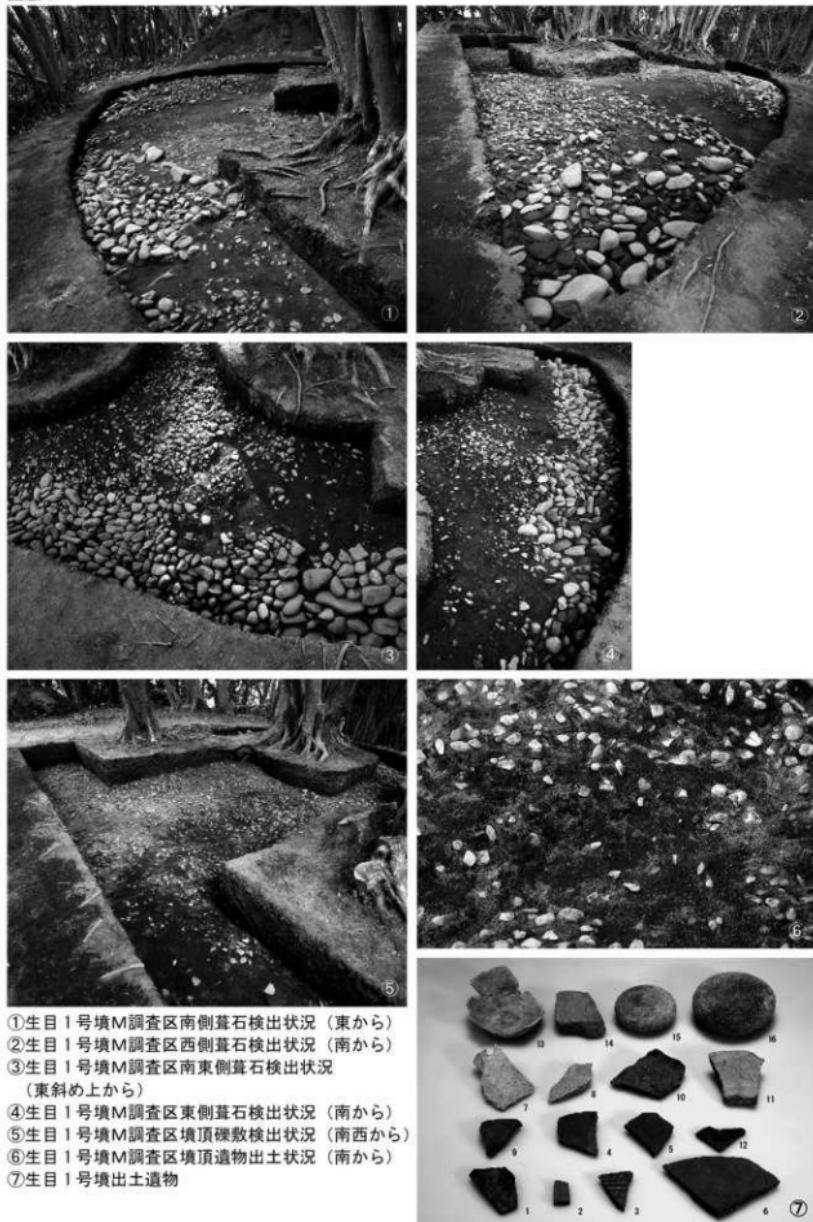
図版 7

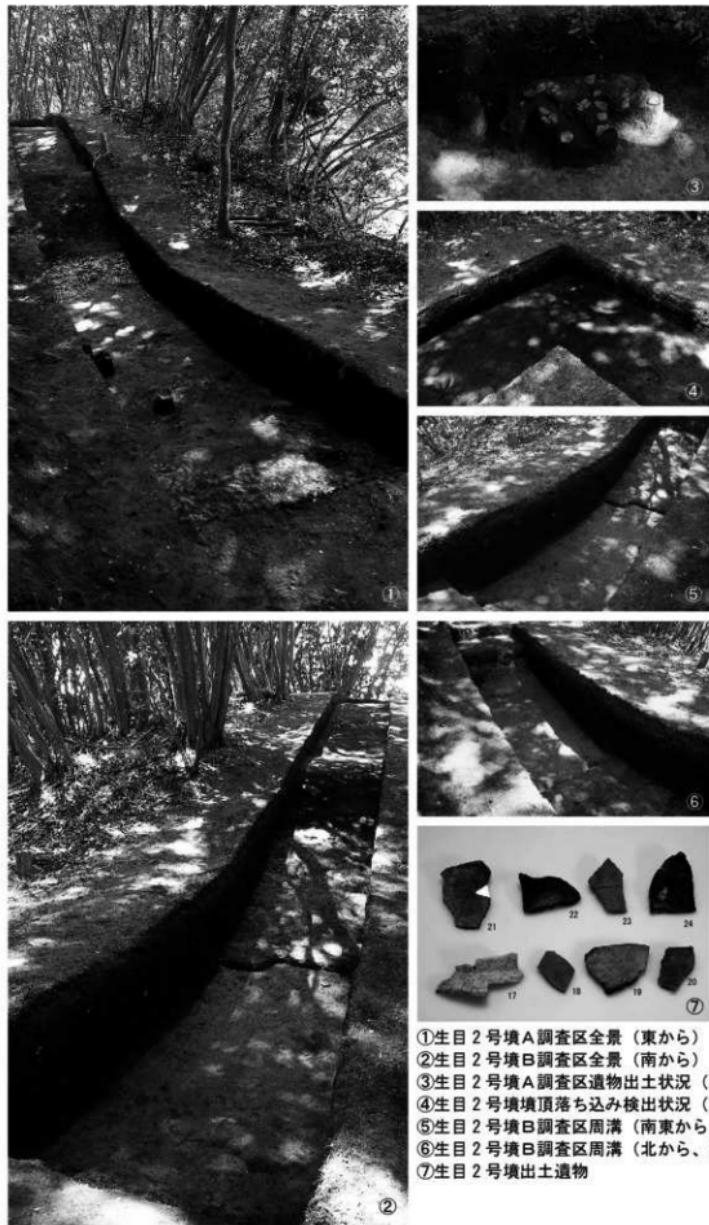




①生目 1号墳K調査区 2段目平坦面（南西から）
②生目 1号墳K調査区磨石出土状況（南西から）
③生目 1号墳L調査区土坑調査状況（北東から）
④生目 1号墳L調査区土坑調査状況（北西から）
⑤生目 1号墳M調査区南東側葺石検出状況（北東から）
⑥生目 1号墳M調査区東側葺石検出状況（北から）

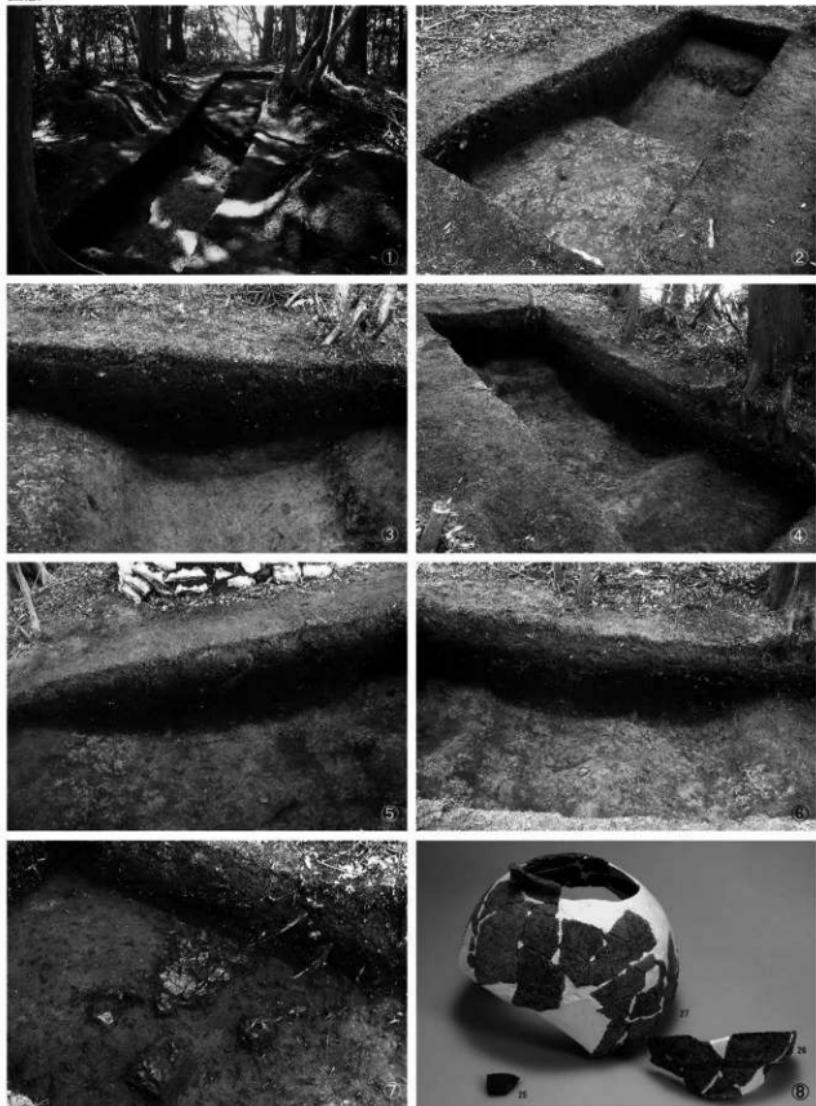
図版 9





- ① 生目 2号墳A調査区全景（東から）
- ② 生目 2号墳B調査区全景（南から）
- ③ 生目 2号墳A調査区遺物出土状況（北から）
- ④ 生目 2号墳墳頂落ち込み検出状況（南東から）
- ⑤ 生目 2号墳B調査区周溝（南東から、墳丘方向）
- ⑥ 生目 2号墳B調査区周溝（北から、周溝外方向）
- ⑦ 生目 2号墳出土遺物

図版 11



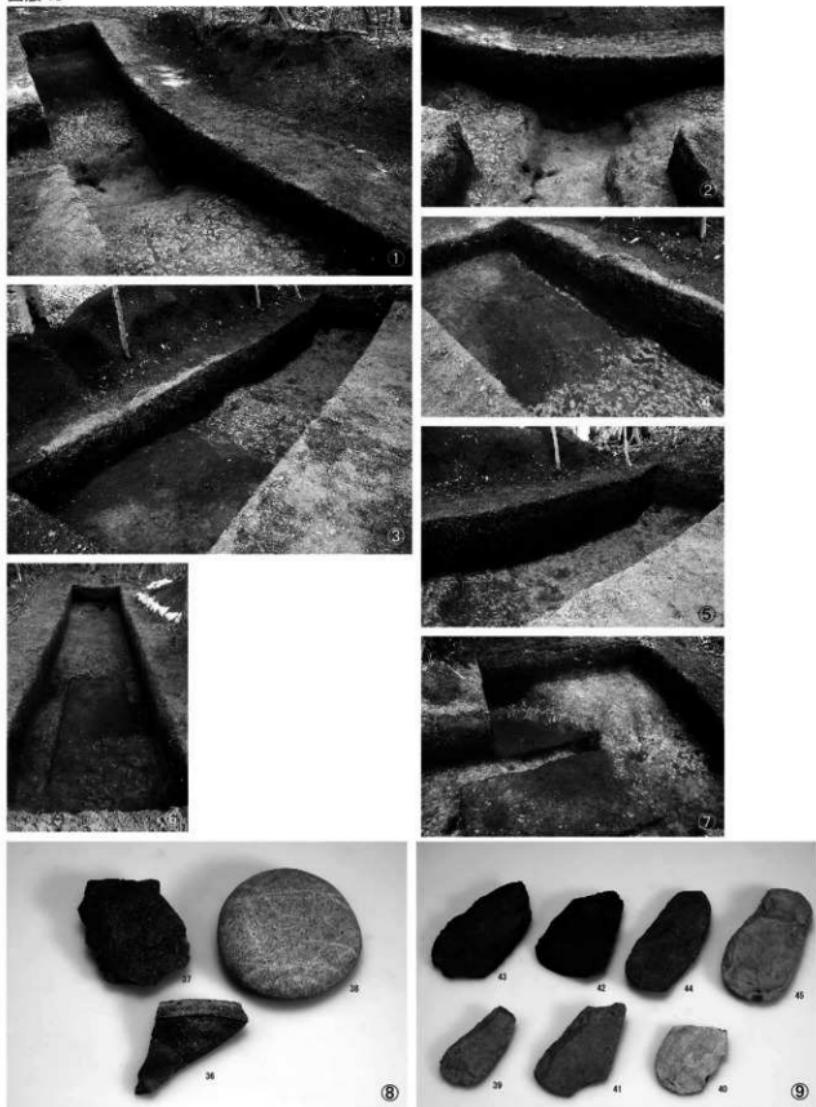
①生目 24 号墳 A 調査区全景（南東から）
③生目 24 号墳 B 調査区周溝断面（東から）
⑤生目 24 号墳 C 調査区周溝断面（北西から）
⑦生目 24 号墳 C 調査区遺物出土状況（東から）

②生目 24 号墳 B 調査区全景（南東から、墳丘から）
④生目 24 号墳 C 調査区全景（東から、墳丘から）
⑥生目 24 号墳 C 調査区周溝断面（南東から）
⑧生目 24 号墳出土遺物



①生目 25 号墳 A 調査区墳丘（北から）
②生目 25 号墳 A 調査区周溝（南から）
③生目 25 号墳 B 調査区全景（西から）
④生目 25 号墳 B 調査区周溝（南東から）
⑤生目 25 号墳 C 調査区全景（南から）
⑥生目 25 号墳 C 調査区周溝断面（西から）
⑦生目 25 号墳出土遺物

図版 13



①生目 26 号墳 A 調査区全景（北から）

③生目 26 号墳 B 調査区全景（西から）

⑤生目 26 号墳 B 調査区周溝断面（南西から）

⑦生目 26 号墳 C 調査区周溝を切る土坑（東から）

⑨その他出土遺物

②生目 26 号墳 A 調査区周溝断面（東から）

④生目 26 号墳 B 調査区周溝に切られる土坑（南東から）

⑥生目 26 号墳 C 調査区全景（北から）

⑧生目 26 号墳出土遺物

報告書抄録

ふりがな	いきめこふんぐんなな									
書名	生目古墳群VII									
副書名	生目1・2・24・25・26号墳発掘調査報告書									
シリーズ名	宮崎市文化財調査報告書									
シリーズ番号	第122集									
編著者名	石村 友規									
発行機関	宮崎市教育委員会									
所在地	〒880-2101 宮崎市大字跡江4200番地3									
発行年月日	2018年3月28日									
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東経	調査期間	調査面積	調査原因			
生目1号墳	宮崎市大字跡江	45201	24-059	31° 56' 54"付近	131° 23' 15"付近	2013.7.2 ～2014.3.27	保存整備			
生目2号墳						2014.7.14 ～2015.3.31				
生目24号墳										
生目25号墳						2015.7.24 ～2016.3.29				
生目26号墳										
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な出土遺物	特記事項					
生目1号墳	古墳	古墳時代	墳丘、葺石、地下式横穴墓	土師器、須恵器、弥生土器、縄文土器、磨石	前方後円墳 後円部、前方部3段築成、 後円部3段目波状葺石					
生目2号墳			墳丘、周溝	土師器、須恵器、弥生土器、縄文土器、スクレイバー	円墳、2段築成					
生目24号墳			墳丘、周溝	土師器二重口縁壺	円墳					
生目25号墳			墳丘、周溝	土師器小型壺	円墳					
生目26号墳			墳丘、周溝	須恵器甕	円墳					
要約	生目1号墳		前方部前面は失われていたが、今回の調査結果に加え、旧測量図を参考に検討した結果、墳長約130mに復元された。後円部では、葺石、礫敷が非常に良好な状態で残存しており、葺石研究の重要な資料が得られた。1号墳に伴う遺物と考えられるのは墳頂で出土した僅かな土師器細片のみであり、遺物から1号墳の時期を位置付けることはできなかった。1号墳の時期は、後円部、前方部共に3段築成であること、後円部3段目斜面の比率が高くなっていること、葺石の構築状況から、古墳時代前中期、4世紀後葉を考えたい。							
	生目2号墳		径30m、2段築成の円墳であることが明らかになった。位置関係と墳形から1号墳と同時に計画されたものと考えられる。							
	生目24～26号墳		残存状況は非常に悪かったが、24号墳は径13m、25号墳は径18m、26号墳は径26mに復元された。							

宮崎市文化財調査報告書 第122集

生目古墳群VII

生目1・2・24・25・26号墳
発掘調査報告書

2018年3月
発行 宮崎市教育委員会